
Find the Hero

清春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Find the Hero

【Nコード】

N8767D

【作者名】

清春

【あらすじ】

国で噂の勇者が行方不明！？それで白羽の矢がたつたのは気苦労ばかりの青年剣士と、幼馴染のぼけててズレてる魔術師だった！二人の珍道中には、美人夫人に可愛い薬屋の女の子、それから魔族にカエルに変態女が次々と現れる！……ってなんか変なの混じってない！？しかも若干出番が早い人が出てきたりします。「ただ今連載休止中です。大変申し訳ありません」

第0話 勇者がいなくなったので…

「あー、その、なんだね、誠に……誠に話しぶらいのだが……」

何度も咳払いしながらちらちらと自分を見る目。正直中年親父にそんなことをされても嬉しくないし、気色が悪いのだが、相手の方が「一応」お偉いさんなので、シュトラウスは我慢してその言葉の続きを待った。

「ふむ、バウス宰相殿はお加減が悪いのではないのか？」

真面目な顔して中年親父の心配している青年が見当はずれなことを言い出した。シュトラウスは「宰相殿」に気が付かれない様に隣を肘でつつく。

「なんだ、シュトラウス。お前は、先ほどから挙動不審に振舞っている宰相殿の様子が可笑しいとは思わないのか？」

「いや、十分分かるぞ。でも黙つとけ。身体の調子が悪い訳じゃねえだろうから」

「そうなのか？それなら、誰かに御身を今まさに狙われているとか……」

「大丈夫だ！そうじゃない！」

隣で自分と同じように膝を床につけている青年は、昔からどこか目の付け所が可笑しい。

さすがに間が長いと感じたのか、宰相の後ろで豪華な椅子に腰を据えていた国王が咳払いをした。宰相は慌てて口を開く。

「そ、そう、だからな、お前たちに頼みがあるのだ。

この国でも指折りの剣士であるシュトラウス・ロベル、そして王宮魔術師であるルノアン・リー・ハーティアに」

そんな前置きは良い、さつさと話せ、とはシュトラウスの心の中の悪態だ。

「は、なんなりと申してください。私でお力になれるのであれば」

こんな殊勝なことをいうのはこの嫌な雰囲気を全く感じ取れていない、どこかボケてる魔術師だ。

いつもなら偉そうなと言う宰相がこんなにも言い淀んでいるのだ。物事が悪い方向へ転がっていきそうな匂いがぶんぶんする。雪原に行つて雪男を捕まえて来いとか言われたらどうしよう、とシュトラウスは真面目に考えていた。

宰相は再び咳払いを始めた。

「……所で、お前たちは『勇者グレイドル』を知っておるな？」

「は？あ、はい、それはもちろん、この国の人間であれば……」

シュトラウスは何を今更言い出すのかと思った。

「勇者グレイドル」とは、幾多の伝説をつくりあげてきた男である。

街に住み着いてしまった竜を倒したり、賊に浚われた聖女を一人だけで救い出したり、呪われた湖を元の美しい場所に戻したり、人間嫌いの妖精たちと交流を持っている、など、彼の噂やら偉業やらはこの国の、一種の話のネタなのだ。

その勇者と、今回の呼び出しと、果たした何か関係があるのだろうか。

「それでだな、実は一ヶ月前ほど、グレイドルに魔王退治を頼んでいたのだ」

「えっ!？」

シュトラウスだけではない、ルノアンも驚きの表情を見せた。

魔王といえば、あの「魔王」。悪の親玉、勇者最大の敵というヤツだ。

とはいえ、シュトラウスのいる国はなぜか、ほとんど魔王の影響は受けず、彼の手先に煩わされることもほとんどない。よって、慈善事業でなければ、わざわざ国王がグレイドルに「倒して来い」とは言わないはずだ。

「もちろん、わが国に魔王の被害が出たわけではないが、最近の奴らの動向がどうもこの先、わが国に影響するかも知れぬというのが結論でな。ちようと同盟国からも勇者に頼んで倒してくれと頼まれて、まあ、そういうことになったのだ」

適当な気もするが、納得はいった。だが、その話がどうして一ヵ月後、シュトラウスたちに齎されたのかさっぱり分からない。

宰相はやはりその先を言いたくないのか口元をこもこと動かした。それに痺れを切らしたのは、シュトラウスではなく、ルノアンだった。

「宰相殿！どうかはつきり仰ってください。我々はどんなことでも受け入れてみせます！」

勝手に我々とか言うな。

だが宰相はとうとう吹っ切れたのか、やつれた顔ながらも最後はやけくそに叫んだ。その声は、謁見の間いっぱいに響いた。

「お前たちに、行方不明になった勇者を探して来て欲しいのだッ！
！！！！」

シュトラウスは、最近いつ耳掃除をしたか思い出そうと思った。

第1話 苦勞剣士とポケ魔術師

シュトラウスはごく普通の少年だった。

港がある少々大きな街に住む、武器屋の息子でしかなかった。

ただ、店や家には武器が当たり前のよう置いてあり、幼い彼がそれを遊び道具にしても可笑しくはなかった。

そんな彼の友人は、二つ下の青白い顔をした貴族の息子だった。

もちろん、普通に暮らしていれば身分違いの彼らが出会う機会はなかったのだが、その貴族の親は実に変わり者で、家に籠る位なら外で走り回って来い、と、息子を放り出す親だった。

おかげで、息子も相当の変わり者で、どこであろうとも本を手放さず、時々地面に木の棒で物書きをするような子供だった。

そんな彼が近所の子供たちに苛められるのには時間はかからなかった。

だが、本人は苛められている自覚がなく、子供たちの無理難題な言いつけにいつも従っていた。むしろ、その難題を自分の頭でクリアすることが楽しい、といわんばかりに、いじめっ子たちに対しても笑っていた。

だがそんな変わり者も、さすがに大切にしていた本を目の前でロボロにされたことには腹を立てた。必死になって子供たちに向かっていたが、体格的にも無理があった。

それに見かねたのがシュトラウスで、彼らを自慢の腕で追い払ってやったのだ。

それからというもの、何かしらの縁があったのか、なんとなく、

二人は一緒に過ごしてきたのであった。

やがてシュトラウスは城から声がかかる程の剣士、そしてルノアンは王宮付きの魔術師に成長したのである。たまに城に呼ばれることがあるため、ルノアンとの交流は、21歳になる今でも不思議と続いていた。

だが、正直、その友人とセットで仕事を与えられるとは思っていなかった。

そして、その拳句が、「現在」だ。

「どうした、シュトラウス。旅立ちの朝にしては浮かないな」

ルノアンとの待ち合わせの食堂。先に来ていた彼は、薄笑いを浮かべているシュトラウスに首をかしげた。

「あつたり前だろ……こんなふざけた仕事、どこにある」

「ふざけてる？何を言っている、立派な任務だ」

シュトラウスは口端をひきつらせると、ゆっくりとした口調で言うてやる。

「あのな、浚われた姫でも探して来いって言うならまだいいんだ。

「だけど、行方不明になったから『勇者』探してくれないかって、なんか可笑しいだろ！？変だろ！？」

ルノアンは実に真面目な顔で聞き返した。

「変か？行方不明なら探すのが当たり前じゃないか。お前、自分の父上や母上がいなくなったら探しに行くだろう？」

「それとこれとは話が違うッ！！なんで勇者が行方不明！？はあ！？まだ死んだとかの方が納得いくわ！！」

「何を言う！勇者が亡くなられたら魔王は誰が倒すのだ。彼こそは私たちの希望ではないかッ！」

この国には勇者狂信者がここかしこといるが、まさか目の前の男もそうだとは知らなかった。

頭を押さえつつ、シュトラウスは愚痴を続ける。

「お前が勇者にどんな幻想抱いてるのか、俺は聞きたくないけどな、行方不明になった理由を聞かされた今でもそんな風に恥ずかしいことと言えるお前はある意味尊敬できる」

「なに、照れるではないか。今更そんなことをいう仲でもあるまい」

本気で褒めてると思っている辺り、この青年に文句を言っても駄目だ。

それでもやはり……………

「『オレはこの世に“ヴァカンス”というものがあることを知りました。』

暫くお仕事はお休みします。探さないでください。

ルより
」

「って城に手紙送ってくるような勇者がどこにいるんだあああ
ッ！！！！！」

「ふむ、私としても勇者殿が『探さないでくれ』と手紙に残しているから、探さないで差し上げたいところだが、国王直々の頼みとあっては流石に断れん」

「違う！感想のポイントが全く違うッ！！！」

ルノアンに共感を求めるだけ無駄だ。それは幼馴染だから良く分かっている。

それでも、誰かに自分の心のやるせなさを分かって欲しかったのだった。

全く気乗りしないまま、シュトラウスの旅は始まった。理由をひっくるめて半ばどうでもいい仕事だった。

「お前と一緒に旅する日が来るとは思わなかったな。思い出さんか、シュトラウス。昔よく街の外に遊びに出て、親に叱られていたな」

長い黒髪に同じ色のローブ。陰気な容姿だが、その表情は子供のものだった。彼のずれた性格は、時々羨ましくなる。

「そんなこともあったか」

今までで一番呑気でまったりとした任務に違いない。むしろ隣にルノアンがいるせいかもしれない。どうして柔らかな日差しの中、野郎と一緒にのんびり隣街までの、緑溢れた道を歩かなければならないのだ。

勇者探しの当はルノアンに任せてある。シュトラウスに任務への熱意がないことと、ルノアンの情報網……というか、顔の広さを頼つてのことだった。そして彼は、取り合えず南へ行こうと言い出した。だから、今は王都を離れ、南の方角へ歩いて一番近い街へと向かっているのだ。

なぜ南かとルノアンに尋ねたら「ヴァカンスというものは南国でするらしい。取り合えずそちらへ行こう」という、あまり根拠のない答えだった。

そうして、このまま国どころか大陸中を歩き回る羽目になったら嫌だ、と考えているシュトラウスの前に、いきなり男が現れた。周りには隠れるような場所——木の一本だって生えてないような、見晴らしの良い場所だ。

シュトラウスは剣を手を取った。

「お前、何者だッ！」

テカテカと光る皮のマントを羽織った、顔色の悪そうな男だった。彼の左眼は長い前髪で見えなかった。

「ふっふっふ、名乗るなら始めに自分が名乗るのが礼儀だろう」

いつきに雲行きが怪しくなった。

「フツ、まあ、今回ばかりは教えてやらないこともない。俺様の名は」

「やつばいい！！聞かせないでくれ！！」

シュトラウスは男の話を無理やり中断させると、ルノアンの背中を押してお急ぎでその場を離れる。

「おい、シュトラウス。彼はまだ名乗っている最中であつたぞ。失礼ではないか」

「アホかッ！！あんないかにも面倒くさそうな輩と係わり合いになるのは御免だッ！！」

だが、いつのまにか二人の前に、男は立っていた。
シュトラウスは慌てて足を止める。彼は怒っている様子だった。

「貴様ッ！礼儀というものを知らんのか！俺様はまだ話している途中だぞ！」

「お前みたいないかにも怪しい奴に俺の礼儀云々を言われたくない！それから、俺らはお前と係わり合いになりたくない！以上だッ！！」

そして再び踵を返して足早に逃げてしまおうとした。

だが、男はよほど頭にきたのか、腰に下げてあつた剣を引き抜くと、そのまま背を向けたシュトラウスに襲い掛かってきた。

それに気がついたルノアンが叫ぶ。

「シュトラウス！」

第1話 苦勞剣士とボケ魔術師（後書き）

ヴァカンス＝南国へ、という意味ではないのでお願いします。

ただ西欧の方は日光浴をするために、南の方の国に行くことが多いそうです。

第2話 不審者には気をつけたい

「はは、俺を舐めちゃ痛い目あうぜ?」

剣と剣の交じり合う間から、シュトラウスは挑戦的に男を睨み付けた。

そのまま力で押し切つてやると、男は素早くその場から離れ、シュトラウスと距離をとった。

勇者ほどの知名度はないが、それでも城からそこそこ頼まれごとをもらうくらいの腕は持っている。

「くつ、たかが勇者を探すだけの人材かと思っていたが……それなりに俺様と楽しめるようだな」

「何だと?」

シュトラウスは剣を握り直した。

「なぜ俺たちが勇者を探していることを知っているッ」

宰相があの中で叫んだとはいえ、一応シュトラウスたちの任務は極秘だ。

——勇者が逃げ……ではなく、行方不明と外部に漏れたら、国民にいらぬ動揺を与えるという城の判断だった。だから、この見知らぬ男がそのことを知っているはずがない。

男は身体を揺らすほど大笑いした。

「愚かな！我が主の前では貴様ら如きの隠し事など、筒抜けだッ！」
「……主だと？」

聞いたいてなんだが、シュトラウスはやっぱり聞かないほうが良いのかもしれないと思い直した。

だが、男といえはよほどその質問が嬉しいのか、今度こそシュトラウスが断りを入れる前に大声で言ってしまった。

「闇を統べる帝王、誇り高き魔族の主！！！」

あ、聞きたくない。

シュトラウスは耳を塞いだ。

だが、それが無駄になるくらいデカイ声だった。

「魔王ロンバディウム様だッ！！！！！」

……………耳の掃除をしたのは、随分前だということにしておきたい。

男——恐らく魔王の手先かなんかの魔族は、言い切った気持ちよさに笑顔を浮べていた。元々顔色の悪いやつだったので、ちよつと不気味だ。

その彼の前に立ちはだかったのはルノアンだ。
手に杖を掲げ、それを魔族に向ける。

「例え相手が魔王とは言えども、私たちの邪魔をするものは赦せん！勇者殿は、必ず私たちが見つけ出してみせるッ」

「戯言を！勇者という存在は主にとって目障りなのだ！

ヤツがいなくなつてやつと平和が訪れたと思っていたら、勇者をわざわざ探そうとするとは、人間とはホントに煩わしいことこの上ない生き物だ！貴様らを倒し、再び安息を手に入れてみせるッ！！」

シュトラウスの的には、魔族が「平和」とか言うなんておこがましいとは思うのだが、勇者を探し^{くた}の件には頷いてしまった。ホント、煩わしい。現にそのせいで、面倒なことになっている。

ルノアンは詠唱を始めた。魔法を呼び出す呪文だ。

それは実に無防備で愚かな行為だった。

詠唱の間、呪文に集中しなければならぬし、しかもルノアンは魔族の目の前に立っている。襲ってくれと言っている様なものだ。

馬鹿っぽかったが、さすがにそこまで馬鹿ではないらしく、魔族は呪文を口にするルノアンに襲い掛かる。今度は剣ではなく、一瞬で伸ばした、紅く長い、刃物のように鋭い爪を彼に振り下ろす。

ルノアンの名を呼ぶ暇もなく、シュトラウスはベルトに仕込んであったナイフを、魔獣の額めがけて放った。

「ぐおッ」

魔族が怯んだうちにそのまま二人の間に割り込もうとしたが、それよりもルノアンの動きの方が早かった。

「来たれ、雷よ!!」

するとルノアンの杖から眩いほどの光が飛び出し、魔族を直撃した。

「大丈夫か!？」

さすが魔族というか黒焦げにはならなかったものの、彼が地面に伏して動かないことを確認すると、シュトラウスは慌ててルノアンの元に駆け寄った。

彼は長い袖で額の汗を拭うと、につこりと笑った。

「さすが、シュトラウス。無駄に長い付き合いではないな。私たちのコンビネーションは完璧だ」

「は？」

「これなら幸先が良いな。国王も、きっと私たちが協力した時の強さを分かっていらしたんだな」

「……」

そんなエスパーな力を国王が持っているとは思えなかったが……問題はそちではない。

シュトラウスは拳を震わせると、幼馴染に怒鳴った。

「お……お前な！！勝手な行動取るんじゃないやねえ！！」

正直、正直な！俺がナイフを投げられたのは奇跡だと思うぜ！？マジ焦ったんだからな！！

何考えてんだよ、お前つ。お前がいつ呪文唱えるとか、俺が分かっていると勘違いしてるんじゃないやねえよなッ！？」

「分かっているではないか。実際、お前はナイフを投げた」

「だ、だっかつら！！それは奇跡だっつーの！たまたまだっつーの！次回は無いってーの！！」

「うむ、この調子なら勇者殿に会うのもそう遠くはなさそうだ」

全くシュトラウス話を聞かず自己完結させたルノアンは、先ほどよりも軽い足取りで歩いていった。

「あ、あいつ、頭のどこかが悪いんじゃないやねえの……？」

頭を抱えてしゃがみ込んだシュトラウスは、ちょうど雷に打たれてうつぶせになっていた魔族がもぞもぞと動き出したことに気がついた。

「ふ、ふふ……た、愉しませてくれるではないか……人間よ……」

「……………」

「これで終わったと思うな……お前らにとってこれは始まり、序章にすぎんだ……」

「……それって、お前みたいな奴らが、今後も俺らに絡んでくるって事か？」

答えてくれるものだろうか、一応、念のため、もしかしたら、という軽い気持ちで尋ねてみる。

「お前らは俺様や同胞たちの手によって、倒されるのだッ」

かなり素直な魔族だった。

「……なる程。でも、少なくともお前は俺たちに倒される訳だな」

魔族が「え？」という表情をして顔をあげた。

シュトラウスはにんまりと笑った。

「じゃあな、“左前髪”」

名前は結局聞かなかったし、左の前髪がやたら長いし。そして、シュトラウスのセンスは最低なほど悪いし。

伝説の勇者を探す青年たちが通り過ぎた跡に残されたのは、哀れな魔族の末路であった。

第3話 搜索開始？

二人の青年はやつと視界に入ってきた光景に足を止めた。

一人は赤銅色の髪に碧眼の青年で、純銀の額飾りをしている。肩からは踝ほどまである焦げ茶色のマントが揺れていて、腰には年季の入った長剣が下げられていた。

もう一人は髪も服装も真っ黒だ。だがそのせいで、彼の夜空のような群青の瞳が際立って見えた。腰まである長い髪が宙を舞う姿は、見るものをひきつける。

王都から南を下って一番近い街が見えてきて、剣士であるシウトラウスはだんだんと好奇心が湧き上がってくるのを感じた。仕事柄王都から出ることは多いが、まだ都近いこの街に来たことは無かったのだ。

「ルノアン、お前、この街知ってんだろ。美味しいものってあるのか？」

結局食べ物のことを聞く辺り、彼の情緒のなさを物語っていた。

ルノアンは顎に手を当てると首をかしげた。

「ふむ、街道の街だからどちらかといえば商業で栄えている所……食べ物に関しては特産品に目ばしいものはなかったな」

「ちえ」

実に残念そうな年上の幼馴染にルノアンは苦笑を漏らした。

「だが、美味しい料理を出してくれる店は知っている。勇者殿の聞き込みが一段落着いたら、行ってみよう」

「おお！お前にしては実に気の利いた奇跡のような台詞だなー！」

なぜ奇跡なのだろうか。

ルノアンは少し考えたものの分からなかったが、時々青年が自分に対してよく分からないことを言うことを思い出した。

彼は足早になったシュトラウスの後を追いかけることにした。

「あの、すみません。勇者グレイドルってご存知ですね」

薬屋でルノアンが買い物をしている傍ら、シュトラウスは店の店主に聞き込みをしていた。

店主は一瞬面を食らったような顔をしたが、すぐに大きく頷いた。

「ああ、そりゃあもちろん。少し前にも山神さまのお怒りをお鎮めになったって話を聞いたな。で、その方がどうしたんだ？」

シュトラウスは軽く咳払いをする。

「その、実はですね。俺の依頼主がぜひとも勇者グレイドルを綴った書物をお書きにならねえと申してまして、こうして皆さんからお話をきいているんです。

それから、やはり勝手に本を作つては失礼でしょう？ですから、彼の居所も捜しているんです。彼を見かけたり、どこかにいたという話はありませんか？」

もちろん、勇者行方不明を隠すための大嘘である。考えたのはルノアンで、建て前くらいはなければ変に勘ぐられてしまうという思いからだつた。

「そうだな……俺はよく勇者様の姿をしらんのだが、確か薄い紫色の瞳にブロンドの青年、つて噂だつたか。そんな容姿の客なんていくらでもいるし……肖像画とかはないのか？」

「う……いや、そういうものはちょっと……」

「考えてみれば、勇者様のグッズなんて売ってるが、肖像画は見たことなかったなあ」

それはシュトラウスも同じで、彼の噂は何十と耳にした事はあるが、実際目にしたことも肖像画を見たこともなかった。

もちろん、顔も分からずに捜しにいくのは賢くない、ということ
で、彼は国王や宰相に彼の似顔絵をくれるように頼んではあったのだ。

しかし——……

『すまん。勇者の顔を知っているもので、絵心のあるものがいなか

った』

そう言いながら渡された数枚の紙には、前衛的な実に斬新かつド下手な似顔絵が描かれていた。子供の落書きよりはマシかもしれないかったが、真面目に描こうとして描かれたものだけあって、逆に特徴が分かりづらいものであった。

その中で一番ひどい絵——さすがにそれは、落書きよりもひどく、すでに人間の顔をしていなくて、目玉だけがやけに大きい、まるで魔物が魔族かそんな絵だった。

あまりに下手だったので思わず噴出してしまったシュトラウスだが、似顔絵を渡してきた宰相が真っ青になっていたのに気がついた。

『どうしたんスカ——』

『……………シュトラウス、そんなにわしの絵は面白いか』

そう尋ねてきたのは宰相の後ろで椅子に座っていた国王で、その真っ赤な顔はひどく歪んでいた。

冷水を浴びせられたような気持ちになったシュトラウスは、何か訳のわからない言葉を羅列した後、逃げるようにその場を後にしたのであった。

そんなわけで、それらの似顔絵が役に立つ訳もなく、地道に聞き込みをするしかないのだ。

店主からの情報はもらえないと分かった辺りで、ルノアンが腕一杯に薬をカウンターへ持ってきた。

「店主、会計を頼む」

「おい、薬を買うのは賛成だが、その量をどうやって持ち歩くつもりだ」

「それは、もちろんシュトラウスが」

「すいませ——ん！お会計ちよつと待ってくださいね——！」

シュトラウスは山盛りのなかから必要な分だけ取り出すと、あとは全て棚に戻してしまった。

「むー。シュトラウス、もし薬がなくなったらどうするんだ」

「そうそうなくならねえよ！つーか、お前がヒール系の魔法覚えればこんなもん買わなくてすむんだけだなッ」

「なんだそれは。私に対する嫌味か」

ルノアンは高度な魔法を扱える王宮魔術師だが、どうも回復系の魔法は苦手で、擦り傷を治すので精一杯の腕前なのであった。

本人もそれに関しては少し気にしている部分があるようで、基本的に嫌味など天然でスルーする彼が、このことに関してはそれが「嫌味」だということに気がつくのである。

機嫌の悪くなったルノアンの肩を、シュトラウスは励ます気持ちで叩いた。

「悪かったよ。ま、適度の薬があれば十分だって話さ。とにかく、次行こうぜ、次」

そうして先に店を出てしまった。

そのうしろからぶつぶつと文句が聞こえたのは、無視した。

ちよくちよくお店を回つては聞き込みをしていた彼らを引き止めたのは、こんな言葉だった。

「そこのお前、待ちなさい」

いかにも偉そうな口調だった。

シュトラウスは一瞬人ごみを見回したが、目の前に立っている貴婦人は真っ直ぐに自分を見つめている。

「えーっと、俺……ですか？」

自分を指差しながら聞き返すと、彼女はくいつと尖った顎を引いた。

おそらく年上の20代後半くらいだと思われる、それはもうスタイル抜群の女性だった。肩の出た紫のドレスを着込み、隣で男が彼女に日よけを掲げている辺り、どこかの貴族か金持ちの娘といったところか。

だが、面識はない。人ごみでも目を引くほどの美人だ、見忘れていることはまずない。

となれば、初対面のはずだ。

はて、なんのようなのかと首をかしげていると、彼女はつかつか

とヒールを石畳に叩きつけながらやってきた。

「お前、私の知^{わたくし}っている子にそっくりだ。どうも他人とは思えぬ。よければうちでお茶でも一緒にどうだ」

「え、ええ、そ、それは……」

女性の勢いに返事を返してしまいそうになる。いや、こんな美人と一緒におしゃべりができると考えただけで、断る理由はなくなる。

ルノアンに視線を向けても、

「おお、シュトラウスにナンパをするような変わった女性もいるものだな」

と、一番の変わり者のくせにそう感心していた。……いや、感心されたくはないが。

だが、やる気はなくてもなにせ街に来たばかり。仕事をほったらかしにして女性にうつつを抜かすのもいかなものか、と、シュトラウスのごく小さな真面目な部分が叫んでいた。

断りたくはないが、一応、お飾り程度に彼は抵抗を始めた。

「あのですね、俺、ちょっと探している人がいるもので……いや、もちろん、貴方のような人のお誘いを断るほどのことでもないんですけどね！ですから、よければもう少し時間を空けてから……いや、いや、もちろん、都合が悪いというなら、今からでも構わないんですけどッ！」

「ほう、探し人とな。それなら私が協力をしようか？私はこの街で

少し顔が利くのだ」

「あ、本当ですか？」

のんきにシュトラウスがこたえていると、隣にいたルノアンがぼん、と手を叩いた。

「もしかして、貴方はコンスタンツ様の奥方様ではありませんか？この街で名君と名高い……」

女性は陽気な笑い声を立てた。

「あの人が名君かどうかは知らんがな。いかにも、私はコンスタンツの妻、セシーリアだ」

ルノアンも丁寧に名前を名乗ったのだが、相方がそれをしないことに訝しげ、彼を振り返った。

するとなぜか、シュトラウスは暗い影を落としていた。

「ど、どうしたんだ？」

慌ててルノアンが声をかけると、彼はぼそりと呟いた。

「結婚……してたのか……」

しばらくその様子を見ていたルノアンだったが、結局何も見ないことにしてコンスタンツ夫人と会話を始めたのであった。

第4話 麗しき夫人の悩み

コンスタンツ夫人、セシーリアに招かれ訪れた屋敷は、白壁と色鮮やかな花々が咲く大きな庭の印象的な所であった。

武器屋の息子であるシュトラウスからすれば、いままでの経験で夫人の館のような場所に訪れた機会が、ルノアンの屋敷と城のごく一部しかないわけで、繊細な屋敷の造りには少々落ち着かない。屋敷には飾り、という以上に玄関も廊下にもどの部屋にも、絵画が異常に並べられていた。

二人が通されたのは日当たりの良い南窓の部屋で、中は心地良い程に温かった。

「何、お前たちは勇者グレイドルを探してるのか」

ソファにゆったりと腰かけ、侍女が運んできた紅茶を飲むセシーリアは、優雅で実に美しかった。

その一挙一動に目を奪われながら、シュトラウスは彼女の問いに深く頷いた。

「はいっ。ですが、捜し始めてまだ二日目。それなのにセシーリア様のような方と出会えるなんて、きっと神の思し召しじゃないでしょうか！」

一旦は結婚していると分かり落ち込んでいたシュトラウスだが、既に立ち直っていた。未婚であろうが既婚であろうが、セシーリアの美しさには関係がないのだ。

妙にテンションの高いシュトラウスに夫人は苦笑を漏らす。

ルノアンといえば隣に座っている青年のせいで、セシーリアと話す事も話す隙もなくなり、ゆっくりと紅茶を味わっていた。

「ふふ、面白いことを言うな。……それでは、勇者がこの街に来たのかどうかを調べればよいか？」

「は、はい！ その、お手間を取らせてしまうとは思っていますが、ぜひお願いしますッ」

「構わぬよ。先に声をかけのは私^{わたくし}なのだ。気にするな。その分、私とたくさんおしゃべりしてくれ」

「そ、それは……もちろん……っ！」

艶やかで熟れた果実のような唇が微笑みをつくるだけで、シュトラウスの心は有頂天にも上るのだった。

セシーリアはテーブルの端に置いてあったベルをつまみあげると、それを揺らして綺麗な響きを鳴らした。

その音がしてすぐに、初老と思われる男性が部屋にやって来た。

「いかなされましたか、奥様」

「うむ、今から勇者グレイドルがこの街にやってきたかどうか、来ていたのならばその日付や滞在日数、それから場所を調べて欲しいのだ。頼まれてくれるか？」

「もちろんでございます。早速、情報を集めてまいります」

実に数十秒のやり取り。

シュトラウスはあまりにあっさりしていたため、本当に勇者の足取りなどわかるのだろうかと思ってしまうた。

「どうかしたのか、シュトラウス殿？」

「あ、いいえ！何でもありません」

「調査には一日、二日はかかると思う。その間、ぜひこの館で休んでくれ」

シュトラウスとしてはセシーリアといられる時間が増えて断る理由がない。ルノアンも、調査結果が分かるまでは待っているしかなく、二人は彼女の好意に甘えることとなった。

三人（実際は二人なのだが）が談話をしていると、セシーリアが突然よろめき、ソファの背もたれに倒れこんだ。

「大丈夫ですか！？」

目頭を押さえるセシーリアの顔は真っ青だった。

だが、駆け寄ろうとするシュトラウスを彼女は制した。

「なんでもない、ただの寝不足だ」

だが、寝不足にしては顔に血の気がない。

「何か眠れない事情でもおありですか？」

ルノアンも心配そうに彼女へ声をかける。

セシーリアは無理に笑みをつくると、無理やり会話の調子を取り戻そうとした。

「ああ、ちょっとな。最近どうも夜中、部屋の外に気配を感じてし

まって。……まあ、思い過ぎだと思うが、ふふ、靈感などは持っているはずなんだが」

「……………」

申し合わせたように、シュトラウスとルノアンは顔を見合わせた。

館の明かりは殆どついていない。肌寒い風が時々服の間を通り過ぎていく。

「やっぱりこれくらいはしないと」

自分のマントに包まりながら、シュトラウスは真面目な顔でルノアンにそう言った。

「そうだな。勇者殿の情報を調べてくれたり、我々に食事や寝所を用意してくれたり、夫人の心遣いに恩返しせねば失礼に当たる。……………」だが、シュトラウス。お前の場合は下心が見えるぞ」

ルノアンが半眼で彼を見上げると、シュトラウスは明後日の方向を向いて口笛を吹き始めた。——しかも彼の場合口笛を本当に吹けないので、掠れた息が口の間から漏れるだけだ。

コンスタンツ夫人が眠れない理由が本当に彼女の部屋の外で見張っていれば分かるのかは分からないが、二人は徹夜覚悟で芝生に

腰を下ろしているのであった。

そもそも霊の仕業だった場合、剣士と魔術師ではどうにも解決できない。明日の夜に聖職者でも連れてこなければならなくなるだろう。

「つーかさ、俺、実は霊とかお化けとか嫌いなんだけど――」

セシリアのためだけを考えていたため、自分の嫌いなものを忘れていた。

シュトラウスの顔は少し青ざめている。

だがルノアンといえば――

「知っている。昔シュトラウスがうちに泊まりに来た時、夜中にお化けが出たと騒いで私の部屋で一緒に寝たではないか」

「えゝえッ！？そ、そーだったか？？」

自分に不都合なことはすっかり忘れていたのであった。

そんな調子で時間を過ごしていたが、いつまでたっても問題の「気配」はやってこない。

眠くてふらふらし始めたシュトラウスは、眠気を吹き飛ばすためにしゃべり続けた。

「やっぱりあれか？俺らがいるのに気がついたのかも」

「かもな」

「今日はもう駄目かなあ。明日はもつと遠くからこの辺見張った方が良いかもしれない」

「かもな」

「お前さ、なんか無いの？姿を消す魔法とかさ。俺、いまだに魔法ってよくわかんねんだよな」

「かもな」

「……………」

「かもな」

「……………話聞いてないだけか寝てんのか、どっちかにしろよ」

結局どちらだったかというと、器用に返事しながらルノアンは、木にもたれかかって寝込んでいたのだった。

第4話 麗しき夫人の悩み（後書き）

ルノアンと夫人の口調が似ているので、微妙に書き分けているんですが

どうも混ざってしまう……。

なんとなく間抜けな方がルノアンです。

第5話 薬屋の一大事

シュトラウスは目を充血させながらも明け方まで起きていた。だが結局、「気配」とやらを捕まえることはできなかった。

「……ラウス……」

「うあ——」

「シュ……ス……！」

「ん——？」

「シュトラウスッ！！！」

「うるせえええッ！！！」

ドスッ、と鈍い音が鳴り、同時に呻き声が聞こえた。

だがそんなものを気にする様子なく、シュトラウスは惰眠を貪る。

「ッう……こ、こいつ……寝起きは本当に最悪なヤツだ……ッ」

お腹を抱えて痛みを堪えるルノアン。理不尽な暴力に涙目も怒りのそれになる。

だが、途中で寝てしまった彼と、朝まで起きていたシュトラウス

と、得られた睡眠時間で考えれば、シュトラウスなど仮眠程度のものなのだ。すんなり起きないのも無理ない。

彼の傍で起こそうとすれば彼の拳が飛んでくる。

しかたなくルノアンはシュトラウスから距離をとり、杖を取り出して朝の陽光の中それを掲げた。

「来たれ、流水よ！」

光に煌く大量の水が、間抜け面のシュトラウスの頭上から降り注いだ。

「ッ！！？？」

いきなり襲い掛かってきた冷たい感覚にシュトラウスは飛び起きた。頭から流れる水を擦るようにふき取る。

「ルノアンの仕業だな！？何しやる！」

彼が立ち上がると足元に水の染みが芝生に広がる。

ルノアンは肩を竦める。

「お前が起きないから悪いんだろ。もう朝食の時間はとくに過ぎている。早く起きないか」

そう言うシュトラウスは口を大きく開けたまま、信じられない

ものを見るようにルノアンを見た。

「なんだ？」

訝しげに見返すと、シュトラウスが手を強く握り締めているのが分かった。

「お、お前さ……俺がいつまで起きてたか知ってるか……？」

「知らん。私は寝てたんだ、そんなことが分かるような特技は持っていない」

素直にそう言ったら、シュトラウスからもう一発拳を貰ってしまった。

シュトラウスたちは夫人への挨拶と朝食を済ませると、再び街中に出て来ていた。

セシリアにはシュトラウスたちの犯人探しの件は話をしてないので、朝が遅い言い訳をしなければなかったが結局、情けないことに二人の寝坊ということになった。（半分事実だが）

調査の結果はまだでていないらしく、やることがない二人は一日が手持ち無沙汰になるのを見越し、夫人の調査とは別で聞き込みをすることにしたのである。

「まあ、俺としてはセシリア様の屋敷で待っててもよかったと思うけど。話がかぶりそうだろ」

「そうは言ってもただぼんやり座っているのはどうなんだ。もしかしたら有力な情報を聞けるかもしれんだろう」

二人がさて、どこから聞き込もうかと昼前の大通りをぶらぶらしている、人の間を掻き分けて走ってくる男性に気がついた。

「――！！！」

何かを叫んでいた。

その男性が目の前に来て、シュトラウスは彼が誰なのか知った。

「あつ、薬屋のおっちゃん？」

昨日お世話になった薬屋の店主であった。

だが店主はシュトラウスなど眼中にないのか、何か一心不乱に駆け抜けていた。

「な、なんだあ？」

すれ違い様の彼の形相があまりにも真剣で真っ青で、ただ事ではなさそうな雰囲気であった。

二人が呆然としてみると、またもや前から走ってくる人がいた。その人は中年の女性で、足元はふらふらとしている。顔は先ほどの薬屋と同様、青ざめていた。

その女性は力尽きたようにその場にしゃがみこんだ。

シュトラウスが傍に駆け寄り助け起こすと、女性は震える声を搾り出した。

「す、すみません……」

「あの、どうかしたんですか？」

尋ねると、いきなり女性が泣き出した。

何がなんだか分からない。シュトラウスは慌てて彼女にハンカチ……がなかったので、自分のマントを差し出した。彼も立派に動転していた。

「実は………それ………むす………あああああつ……！」

なんとか事情を説明要してくれようとしたらしい。でも、彼女の鳴き声はいっそう激しくなった。

視線を感じてその先を向くと、通行人たちがひそひそ話をしながら自分たちを見ているではないか。

「ちょ、ちょっと！カンベンしてくださいよー！！なんか俺が泣かしてるみたいじゃないっすか——！！」

だが女性は泣き止まない。

絶るような思いでルノアンを振り返った。

ルノアンはシュトラウスから距離をとった場所から、腕を組んで立っていた。

「どこのどいつかしらんが、こんな街の往来で女性を泣かすとは……」

……

「てめえ……！いかにも他人の振りしてんじゃねえよッ……！」

女性が落ち着いてきたことに気がついたのもう一度声をかけてみる。

「大丈夫ですか？ いったい何があったんですか」

すると荒い息をしながらも女性は懸命に答えてくれた。

「そ、それが……私の、私の娘が昨日から行方不明で……」

「行方ふめ……」

大声を出してしまいそうになったのを慌てて自分の手で止めた。

シュトラウスは彼女を道端に促すと、確認するように尋ねた。

「行方不明と言うのは本当ですか？」

「え、ええ。わたしと主人は薬屋を営んでおりまして、娘はよく店の手伝いをしてくれるんです。昨日も夕方近く、残っていた配達の仕事をしに店を出て行ったんですが……」

やはりさきほどの店主の慌てぶりはそういう事情があったのか。

「それつきり夜になっても帰ってこないんです！ そんなこと、一度もなかったんです。それに、とっても親思いのあの子が、むやみに私たちに心配をかけるようなことをするとは思えません。配達先のロブさんに聞いても、昨日あの子は家に来てないって言ってるんで

す」

そこに割り込んだのはルノアンだ。

「失礼ですがお嬢さんの容姿や年齢をお聞きしても宜しいですか？」

「え……」

「あ、できればいなくなる直前の服装なんかも！」

シュトラウスも加わる。

女性は困惑気味に青年たちを見上げた。

「あ、あの……？」

「俺らでよければ力になります」

そうして、任務とは別に行方不明になった娘の搜索が始まったのだ。

第6話 美女行方不明事件

「たつのしみだわぁ」

昼間だというのに薄暗い森の木の上で、張りのある足を組んで眼下を見下ろしている女性がいた。

彼女の足元には、虚ろな瞳をした女性たちがふらふらと身体を揺らしながら立っている。

「んふふっ、あと一人って所かしら。あたしの美しさのためにその身体も魂も、捧げなさい」

女性たちの中に、まだ幼さを色濃く残す少女もいた……………

勇者捜し所ではなくなったシュトラウスたちは、薬屋の妻から聞いた行方不明の娘の容姿を手がかりに、街中を走り回ることになった。

名前はルヴィ、15歳。肩くらいまで伸びた赤毛に、茶色の瞳だという。瞳と同じ茶のストライプの入ったワンピースに、白いエプロンも身に着けているらしい。

だが、空が朱に染まった頃になっても二人は少女を見つけれなかった。

「くそッ……全然手がかりもないんじゃない、探しようねえよ……」

悪態をつくシュトラウス。ひとつひとつ怪しい場所を潰していても、闇雲に時間が過ぎるだけだ。

淡い期待を持って薬屋に行ってみてもそこに少女はおらず、頭を抱えて頂垂れる薬屋の夫婦がいるだけだった。

店主がドアの前に立っているシュトラウスに気がつくと、よろけるように傍へ寄って来た。

「剣士の兄ちゃん……る、ルヴィは、ルヴィはいたのか……？」

店主だって分かっているだろう。唇を噛み締めて俯く青年の答えが、肯定を示すものではないものくらい。

「悪い……」

そう言つと、店主は倒れるように床に手を付いた。

「ルヴィ……ルヴィ……」

ただ泣くその姿に、シュトラウスは目を背けた。

そこヘルノアンがやって来た。

彼だけじゃない、後ろにはセシーリアもいた。

「シュトラウス殿、事情はルノアン殿から聞いた……」

黄昏色に染まったセシーリアの顔は、心配そうにシュトラウスと店主を見つめた。

ルノアンはシュトラウスに近づくと、耳元で小さく告げる。

「実は夫人から聞いて驚いたのだが、この街で行方不明になったのは主人の娘だけではないんだ」

「何だと？」

目を見開いてルノアンを見返すと、彼は深く頷いた。

「昨日と今日合わせて、六人の女性がいなくなってるんだ。この短時間にこの人数。可笑いと思わないか？」

「そんなに…… いったい、どういうことなんだ」

「分かん。だが、何かが起きていることは間違いない」

セシーリアはドレスが汚れるのも構わず店主の前に膝をつけると、強く彼の手を握った。

「ノース、希望を捨てては駄目だ。ルヴィは必ず帰ってくる。親であるお前が信じなくて、どうするのだ」

「セシーリア様……」

弱々しく見上げる店主に、セシリアは微笑んだ。

「街の警備兵たちにも搜索するように頼んである。ノース、それからカエラ、お前たちは休んでいる。その様子では寝ていないのだろう？ ルヴィが帰ってきたときにお前たちが倒れていては、あの子を抱きしめてあげられぬぞ」

彼女がそういうと、店主はゆっくりながら、彼女の手を握り返した。

「分からん！ 一体全体、この街になにが起こってるのかまるで分からん！！」

一度セシリアの館に戻ったシュトラウスたちだが、物事の解決策はまるで浮かばない。

彼は一番初めに通された時の部屋の中を、ぐるぐると回り続けている。

ソファに座り込んだルノアンは何かを考え込んでいるようだった。

「シュトラウス殿、一度座られたらどうだ」

セシリアがそう言うので、シュトラウスはいい加減に足を止め、ルノアンの隣に腰掛けた。

「で、ルノアンは何考えてんだ？」

先ほどから何も言わない幼馴染のことだ、もしかしたら妙案でも浮かんでいるのかもしれない。そんな期待を持って尋ねた。

ルノアンは半ば独り言のように口を開いた。

「夫人、もう一度行方不明になった人たちのことを聞かせてもらえますか？」

「ああ、それは構わぬが……」

セシリアの話をもとめればこうだ。

六人は10代半ばから30代前半の女性たちで、彼女たちそれぞれにお互いの関係はほとんどない。いなくなった場所は特定できていないが、彼女たちが最後に見かけられた場所を考えると、ばらばらの場所ではないようになっているようだった。

彼女たちに唯一共通しているところといえば……――

「……………誰もが認める美人、って所か」

まだ15歳のルヴィが美人かどうかは判断しかねるが、美人になりそうな容姿であったのだろう。

「ホントに美人なのか？多少可愛いとか、多少顔が整ってる、とかじゃなくて？」

「そうだ。どの女性も男性からの誘いは多かったらしい。

ルヴィはまだ子供だが、とっても可愛い子でな。この子も近

所では一番の女の子だったみたいだ」

セシリアはそこで心配そうに目を伏せた。

「で、何が分かるんだ？居場所分かりそうか？」

身を乗り出してルノアンを見る。

だが――

「いや、こんな情報では彼女たちの居所なんて分かる訳なからう」

はつきりと言い切るルノアンが、むしろ気持ち良いくらいだった。
シュトラウスは脱力してソファから転がり落ちた。

「て、てめえなあ……こんな時に――ッ」

「しかし」

ルノアンはため息を零した。

彼の眼はセシリアに向けられた。

「夫人は暫く屋敷にいたほうが良さそうですね」

わたくし
「私が？」

驚くセシリアにルノアンは続ける。

「偏見ではないと思いますが、婦人はこの街でも群を抜いての美人でしょう。もしもこの事件に犯人がいるならば、その貴女が狙われない、という方が可笑しいと思います。この様子では……」

確かに、この街に限らず王都でもセシーリアの美しさは群を抜くだろう。彼女が国の女王だと言っておかしくないくらい、威厳すらある。もしこの行方不明が誰かの手によって起こされたものならば、彼女を放っておくことがあるだろうか。

セシーリアは細い喉元で唾を飲み込むと、真っ直ぐにルノアンを見据えた。

「……………ルノアン殿、私がもしこのまま無防備であれば狙われる確率が高いと思うか？」

「そうですね……………貴女は夜中に誰かの気配を感じていらつしやるようですし、もしかしたら既に目を付けられているのかもしれない……………」

「そうか…………ツ！」

夫人が眠れない原因は、彼女を下見していた何者かの仕業だったのか。

「セシーリア様、貴女は絶対に俺が守ります！！」

シュトラウスの意気込みは強かった。

しかしセシーリアは頭を振った。

「……………守らなくて良い。だが、私に協力してくれないか」
「え…………？」

彼女はシュトラウスを見上げた。その瞳は不安げであったが、宝石のようだった。

「私を囷にして、犯人を捕まえてくれないか？」

第7話 薔薇庭と犯人

三日月よりも細い月。

紺色の空には黒い雲が漂っている。

薔薇の咲き乱れる庭で花と戯れる女性は、実に幻想的で美しかった。

「こんな夜に一人で花見？家の庭とはいえ、無用心ね……」

その嘲笑うような声が闇の中、どこからともなく聞こえて来た。

女性は薔薇の匂いをかぎながら、ゆったりとした様子で答える。
彼女の瞳は閉じられていた。

「光ない場所でも美しく輝けるものこそが、本当に“美しい”とは思わぬか？……それに夜の方が一人でじっくり花を味わえるというものだ」

慌てた様子も、驚く様子もない。

それに声の主はしばらく言葉をなくしたが、やがてゆっくりとその正体を月光に晒した。

セシリアに負けないほど身体の凹凸がはつきりした女だ。胸元もお腹も太腿も衣服に隠れておらず、露出が多い分彼女よりも艶かしい雰囲気強い。

短い髪は目が覚めるような緑色で、瞳は少し曇った金色だった。

「……………ちょっとは驚いてくれないとつまらないね。

まあいいわ、あんたの美しさは思った以上のものだし、思わぬ見つけ物をした気分だよ」

女の背中から黒い触手が伸びる。それは、薔薇を散らし、汚していく。

もらった、と女が心の中で呟いた途端、黒い彼女の一部は真っ白な残像に叩き切られた。

痛みはない。所詮彼女の一部であつても代わりの出てくるものだ。だがそれよりも、邪魔者の存在に怒りが湧いた。

「だれさ！！あたしを切った畜生はっ！！」

その答えは声ではなかった。

女は血の滴る触手を再生させると、背中に襲い掛かって来た刃をそれで弾いた。

マントを羽織った青年が衝撃で地面を転がったところを、触手の先の太い針で貫こうとする。

青年は素早く身かわし、吹き飛んだ剣を手を取った。

「邪魔だよッ！！」

態勢を整えようとする青年の首に黒い触手が絡まる。

「シュトラウス殿っ！！」

女の獲物が叫ぶと、青年のもとに駆け寄り、首から触手を剥がそうとした。だが、彼女の白く細い腕ではとうていどこまでできる代物ではない。

さつさと首をへし折ってやろうと力を込める。

同時に、魔力の気配を感じた。

「招かれよ、炎帝ッ！」

その声が響くのと同時に女は触手を青年から放し、自分の立っていた場所から離れた。

空気を伝う熱に顔を顰める。

「なんなんだい、あんたたちッ！このあたしを誰だと思ってるんだい」

「知らねえよ！」

だがな、お前が何人もの女性を行方不明にさせた張本人だってんなら、俺は絶対赦さない」

そこで彼女は気がついた。

剣を握る青年と、黒いローブを着た青年の容姿を、微かな月明かりの中に見た。

女は紅の引かれた唇を震わすと、その間から笑いを零した。

「そうかいそうかい。あんたたちが噂の！！」

ふッ、こりゃあ手間が省けたね。そんなに怒んなくなつていいのさ、ボーヤ。あたしはちゃんとあんたたちの相手をしてあげるのに」

「わっけわかんないこと、言ってるんじゃないやねえよ！！いいから皆を返せッ！！」

「あーはいはい。あたしの用事が済んだら“外見”そとみくらいは返してあげるわよ」

頭に血を上らせたシュトラウスが怒鳴り返そうとしたのだが、女の笑みが急に消え、言葉を失ってしまった。ただ「モノ」を見る目つきで、二人を見る。

「あんたたちにいられちゃあ、魔王様にとつてもあたしたちにとつても都合が悪いのよ。さっさとこの世から消え失せて、ってんのよ」

彼女は掌を突き出した。

シュトラウスは自分の確信を口にした――

「お前、やはり魔族かッ！！！！」

「シュトラウス……！！」

恐らくこの時、ルノアンがシュトラウスの身体を突き飛ばさなかつたら、彼は身体のどこかを失っていただろう。いや、何も残らなかったかもしれない。

女――魔族の放った衝撃波から逃れた二人は視線を彼女から外さ

ないように後ずさった。

「死ねよッ！！」

口端は裂けて齒はむき出しになり、金色の目が大きく膨れ眼球が前に半分飛び出した姿は、あまり見ていたくない部類のものだった。本性を現した彼女の次の攻撃がどれほどの大きさのものなのか、シュトラウスたちも、空気の凝縮する感触によって知らされる。

ルノアンが急いで呪文を口走るが、間に合わない。

シュトラウスは彼と、そして後方で成り行きを見つめていたセシリアを庇うように前に飛び出した——無駄な行為だと言うのは、分かりきっている。

大きな光が辺りに溢れた瞬間、シュトラウスは自分が死んだのだと思った。

「馬鹿者ッ！！！！」

その声と、ひどく間拔けな音がしなければ——

第7話 薔薇庭と犯人（後書き）

戦ってるっぽいシーンは難しいのですが、読みづらいのではないのかと

ドキドキします。どうでしょうか？

それから、だんだんノリが重くなっていてすみません。

シリアスって程じゃないけど、いつのまにか真面目な雰囲気……次はかなーり軽くなると思います。

第8話 本物or偽者or変質者

恐る恐る瞑っていた目をあけてみると、薔薇庭の中に見知らぬ長身の男が立っていた。

銀色の肩下まで伸びた髪と紅い血の様な瞳が実に印象的で、同時に人間らしさのない美しさを持った男だった。俗に言う「人外の美しさ」ってやつである。

襟の立った純白の生地に紅い刺繍の入った上着を着て、それがよく似合っている。実に眉目秀丽。さすがに男の美醜など関心のないシュトラウスでさえ、「美男子」とはこういう男のことを言うのか、と感心してしまった。

だが、その男は綺麗過ぎるがために、彼の今の姿の間抜けさを引き立たせていた。
実に。

男は右手でキレていた魔族の項を掴み、左手で——なぜかお玉を握っていた左手で、彼女の頭をもう一度ぽかつ、と叩いた。

魔族と言えば痛みも感じないのか、口を大きく開けたまま男を凝視していた。

「俺は言っただろう！あれだけ手を出すな、と——！」

「す、すすす、すみ……ませんッ……！！その、そそそ、そのですね、これは、ちょっとした暇つぶしというか、いや、でも……」

先ほどのマジな展開など片鱗も見えない。

魔族は男に深々と頭を下げ、両手の指をせわしなく合わせ、まるで母親に悪戯の見つかつた子供のように言い訳のようなものを始めた。

いきなり疎外されたシュトラウスは静かにルノアンの隣に並ぶと、ついていけない急展開に疑問符を浮べた。

「誰だ、あの男。つか、俺ら忘れられてないか？」

「確かに……しかし、あの様子ではあの男、魔族の知り合いのようだ。彼も魔族なんではないだろうか」

「……………魔族、ねえ……………」

なんとなく「魔族」と認めたくない。そういう気持ちでシュトラウスにはあった。

美男子は美男子で、容姿には問題ない。

問題はないが……着ているものに問題がある。

想像してみてくれ。

街で見かけたちよつとカッコイイな、と思った男が、白いふりふりのフリルをつけたエプロンを身に着けて手にお玉を持っていたら、どうだろうか？

想像してみてくれ。

面倒見の良い後輩思いの先輩の家にお邪魔した時、その彼がこっそり女物の可愛いエプロンを着ていたら、どうだろうか？

「……………笑って良いか、俺」

「止めておけ、失礼だ」

そういうなかなかしにくいギャップを、目の前の男は平然とやっているのであって、これが笑わずしてどうすれば良いのだろうか。

新妻ルツクの男は三度目、魔族の頭をお玉で（軽くだが）殴った。

「痛っ！でもでも、ですね！あのボーヤたちなら殺^やつてもいいと……」

「ああ、あのガキ共ならな！！だが、お前の目は節穴か！目は付いてるのか！

その後ろに人間の女がいただろうがッ！お前のさっきの攻撃では、あれも死んでいただろうがッ」

そう言われて行き成り指差されるセシーリア。彼女は一瞬身体を竦めた。

だが男が何かをすることもない。

「なんか、私たちは死んで良いつて、よく考えると酷いな」

「いやいや、酷いつて言うか、殺つて良いつてむしろ攻撃的な発言だぞ」

だいたいなんであのふざけた男に自分の命を殺つていいかどうかの許可が必要なのだ。

勝手にのどかなシーンを見せられていた二人も、そんな調子でどこか冷静な会話をしていたわけなのだが、次の言葉を聞いた時はそれをすっかりスルーしてしまいそうになった。

「うっ、すみません、魔王様っ……！」

という、なんとも情けない声で発せられた言葉を。

「そういえばさ、いま思い出したんだけどよ。二年前くらいに俺、お前に昼飯おごったよな。王都の珍味・東洋料理店の旬魚のブランチ。あれって結局美味しかったのか？ ルノアンなんにも感想言ってくんなかったから、あの後結構気になってたんだぜ。俺はおそろしくて飲みもんしか頼まなかったしよ」

「おお、そんなチャレンジャーなこともしたな。あれはあれで結構いけたぞ」

「ならなんでノーコメントだったわけ？ 俺、壮絶にまずかったのかと思っただじゃねえか」

「むー。なんというか……口に出して感想を言う類の味ではなかったのだな」

「どんな味だよ。王都に帰ったら俺も食ってみるかなー」

「謝つてすむなら誰だつてする！ だいたい、お前、また人間の女を集めて『心』を喰おうとしただろうがッ。それもやるなと言ったぞ、俺は……！」

「でも、別に、人間の『心』を喰ったところで殺すわけではありま
せんし……」

「それは死ななくても死んだも同じだ。心のない者はただの人形、
それはもう『人』とは呼ばない。よって、お前は二度も俺に逆らお
うとしたわけだなッ！」

「そ、そんな——」

「私もちよつと疑問に思っていたことがあるのだが。聞いて良いか
？」

「なんだよ、改まるなよ。気持ち悪いじゃねえかよ」

「酷い言い草だな。まあ良い。私が聞きたいのは、なぜお前はお前
の父上の武器を使って差し上げないんだ」

「はッ？あ、あー……」

「父上が折角お前にプレゼントしてくれていたではないか。お前が
あの街を出る時もそうだ。それに時々、送ってくれているだろう？
どうしてなんだ？」

「……………それがだな、あー、俺の親父の、そのー、……………あまりな
センスが良くなくてな」

「なる程。お前が息子だからか」

「いやいや、俺が息子のせいじゃねえだろ。むしろ逆だろ。つーか、
それは遠まわしに俺のセンスが悪いって言いたいのか？」

「……………で、つまりお前の父上の送る武器はお前の趣味と合わない
ので使っていないのだな」

「なんでスルーするんだよ。ちゃんと見えよ。……………」

「だいたい、人間の『心』を喰らって美しさを保とうなどとは嘆か
わしい。少しは自分で努力をしないか。太ったならちゃんと運動を
しろ」

「うつ……魔王様は女の苦勞と言つものを何も分かつてらっしやらないんです……。というか、なんで太ったって決め付けるんですか……」

「……………」
「？ どうした、シュトラウス。ものすごく変な顔をしているぞ」
「……………??」
「鼻がかゆいのか？」
「……………」

シュトラウスは目を閉じて指でそこを押さえた。

「いや、この場合は耳の心配をするべきなのか？」
「お前は時々、変なことを言うな」
「んー……お前さ、あっちの女が『魔王』とか言つの聞こえなかった？」
「む？ そうなのか？」

ルノアンは叱責を続ける男を振り返った。

「お前の言うことが正しければ、彼が『魔王』ということになるが」
「うん。でも……………」

男はふりふりの可愛いエプロンに、お玉を装備している。

顔を見合わせた二人はにっこりと笑いあった。

「「ないな」」

むしろその言葉には、そうじゃなければ良い、という思いが込められていた。

そこでシュトラウス話を聞いていたのか、男は行き成り二人の方に顔を向けた。ついでお玉も。

「その人間共。現実逃避したくなる気持ちも分かるが、認める勇氣も必要だぞ。」

俺は誰もが平伏す魔族の王・ロンバディウム。覚えておいて損はない」

だが言葉はそれっきりで、男は再び魔族に向き直り、説教を始めた。ものすごくフランクな雰囲気です。「魔王」を名乗ったのだが……それで良いのだろうか。

「あれか？影武者……とか？」

「それにしてもその役割を全うしてない男だな。あんな恰好では否定される要素が多すぎる」

「意外性で俺らを驚かそうとしたのか？隙を作らせるため、か！」

男——魔王（？）は再び振り向くと、またもお玉を掲げた。

「この恰好はどう見ても料理の最中だろうが！人間共の頭ではそれ

「が分からないのか!？」

「あ、ちなみに今度の料理は何を作ってるんですか？」

女魔族の問いに魔王（？）は得意げに答える。

「ふつ、今日は海老のすり身と季節野菜入りのデミグラスソース掛けオムライスだ」

「ほお、それは美味しそうだな」

「そうだろう？時間が許せばお前らにも食わしてやっても良いのかな」

「むー。それは残念だ。ぜひ機会があつたら頂きたいものだ」

「……なに自然に会話してんだよ」

「ごく普通に会話を成立させている幼馴染と魔王（？）。これをつこまずしてどうしろと。」

その時魔王（？）が突然小さな叫び声をあげた。

「しまったッ!!!火をつけっぱなしにしてこっちに来たんだった!!!」

ほら、オルティス、帰るぞ!！」

「あ、はい」

魔王（？）が右手を宙にかざし、呪文を唱えると、何も無い空間にぽっかりと大きな穴が開いた。穴の先は色んな色が混ざり合っては離れ、ぐるぐると渦巻いている。

ぽかんとして様子を見ていた二人だったが、セシーリアの声で我に返った。

「ラヴィを……皆を返してくれ!!」

その穴に腕を突っ込んでいた魔王（?）を止めるためにシュトラウスは剣を抜こうとした。ルノアンは杖に指を掛けていた。

だがそれよりも先に、魔王（?）が後ろで待っていた女魔族に振り返った。

「オルティス、お前まだ人間共を戻してないだろ」

「そ、そうでしたね」

「さつさとしろ。俺の城が火の海になってたらどうする」

彼に急ぎ立てられ、女魔族は慌てて両手の指を合わせると呪文を唱えた。

葉が擦り合う音が耳に響き、音の方を振り返ると、薔薇庭の先にあった小さな雑木林の中から女性たちがゆっくりとした足取りでやってきたのが見えた。

セーリリアが何かに気がつき、そちらへ駆けて行くのが分かった。

シュトラウスは魔王（?）に視線を戻すと、鋭く睨んだ。

「どういっつもりだ、お前」

魔王（?）は眉に皺を寄せた。

「どいっつもり、とは、どういう意味だ？」

「お前が魔王なのかそうじゃないのか、それは問題じゃない。

仮にもお前が魔族だって言うなら、なんで俺らを助け、女性たちも返すんだ」

どう考えても魔族のすることではない。

彼らは人間を蹂躪し、人間を狩る。人間と魔族の戦いが無い日は無いのだ。

ただ、この国では――

「ふん。理由をわざわざお前ら如きに教えるものか。

だが、俺はこの国の人間共だけは見逃してやると決めているんだ。ありがたく思え」

「何だとッ」

頭に来たシュトラウスが剣を振り上げるが、魔王（？）が放った黒い光が一瞬にして彼を包み、遠くまで吹き飛ばした。

彼は呪文を唱えなかった。

その事実、ルノアンは驚愕した。

「俺は優しいから、警告しといてやる。俺はこの国の人間には手を出さない。だが、お前らは別だ。残念だったな、大人しく指をくわえていれば放っておいたものを……。せいぜい寝首をかかれないように、背後には気をつけておけ」

魔王はその身体を穴に全て入れる前に、もう一つ言葉を残した。

「あの勇者というガキも例外だな――」

第8話 本物or偽者or変質者（後書き）

会話ばかりでした。 場景分りずらかったかな？
すごい大御所がでたわりに地味な登場でしたね。

第9話 一息つく間もなく

「本当に、ありがとうございましたっ」

セシーリアの屋敷の一室で、一人の少女がぺこりと頭を下げた。彼女の肩から赤毛がぱらぱらと落ちる。

「もういいよ、そんなに頭下げなくても——」

行方不明、訂正して誘拐事件は一応解決した。

浚われた女性たちを家に送り届けたシュトラウスたちはもう一泊セシーリアの屋敷で過ごし、現在に至る。

女性たちは次々にお礼にやってきて、ついでに果物やお菓子など気持ちとしてシュトラウスたちに渡していった。おかげで、部屋の机には小山のようなお礼品が積まれている。

赤毛の少女——ルヴィは花のように可愛らしい笑顔を浮べた。

「おー。このパンケーキ、なかなかいけるぞ」

ルノアンはすでにプレゼントを口に入れて、その美味しさを味わっていた。相変わらず彼は全身真っ黒だ。

「本当ですか？良かったです、気に入ってもらえたようで！
ぜひシュトラウスさんも食べてくださいね」

歳が離れているとはいえ可愛い少女にそう言われてしまい、彼もルノアンから残りのパンケーキをひったくると一口味わった。

「ん、うまいな」
「よかったあ」

二口、三口と食べ進めていると、セシーリアが部屋にやって来た。
今日の彼女は出会ってから一番輝いている。

「ルヴィ。身体はなんともないのか？」

「はい！もうなんともありませんっ。セシーリア様にも心配かけちゃって、ごめんなさい」

「お前のせいではない。それに、お前が無事ならそれだけでいいんだ」

優しく微笑むセシーリアはどこか聖母のようだ、そうシュトラウスは思った。

「ほら、まだ陽はあるが早く帰りなさい。ノースたちも昨日の今日で心配するだろうし」

「はあい」

素直にルヴィは返事をする、もう一度シュトラウスたちに振り返った。

「シュトラウスさんたちは明日の朝この街を出られるんですね。わたし、見送りに行きますね」

「別にいいんだぞ、そんなことまでしなくても」

「でも折角知り合えたのにすぐお別れでしょ？だから、最後まで見送らせてください」

ルヴィはぺこりとまた頭を下げると、ぱたぱたと廊下を駆けて行

った。

セシーリアは軽く一息つくと、手に持っていた紙を机の上に置いた。

「これが勇者グレイドルに関する情報だ」

昨日の出来事ですっかり忘れそうになったが、シュトラウスたちの目的は勇者捜しだ。

二人はじつと机上の洋紙を見つめた。

「……見ての通り、洋紙が一枚。あまり役にたてなかったようだ」

気落ちした様子を見せるセシーリア。

だが始めから勇者を見つけられるとは思わないし、セシーリアが協力してくれたのは全くの善意からである。彼女が申し訳なく思う理由はない。

「そんなことないですよ。ありがとうございます。……それで、勇者はこの街に来ていたのでしょうか？」

セシーリアはその問いに強く頷いた。

「ああ。時期は一ヶ月経たないくらいか。街の宿屋を借りていたことを主人が証言してくれたらしい。名前は『グレイドル』を名乗ってはいなかったようだ、ブロンドに紫の瞳の青年だったようで、腰に特徴のある剣を下げていたらしい。宿屋の主人はちよつとした武器好きだったらしくそれに興味を引かれてよく覚えていて、しかもその剣が勇者が持つ特別な剣だということに気がついたようだ」

「岩をも両断すると言う、聖剣デュルダリアですね」

継ぐ気はなくともシュトラウスは武器屋の息子。聖剣や名剣を始め、名のない武器などにも知識が広い。

「聖剣デュルダリア」は細身の剣だが、その強靱さは大木や大岩を切り裂くことから認められていると言う。柄の中には聖剣が創られた時代の聖女の髪と、かつて大陸を蹂躪していた帝王の血、そしてこの世界のどこかに存在すると言われる聖なる木の葉が納められている。

武器マニアなら涎を出すほどの武器で、大陸の国々も聖剣となれば自分の国にあつてくれたら嬉しいわけで、だれもがその剣ぜひとも手に入れたいと願うものなのだ。もちろん、シュトラウスだって手に入れたら一週間は興奮で寝られない自信がある。

どんな因果か、その聖剣はいま、勇者と呼ばれるグレイドルの手にある。

それは彼の名前と同じくらい知られた事実である。中にはその剣欲しさに勇者に挑んだ愚か者もかなりいるらしい。

「それなら勇者がこの街にいたと思って良さそうですね」

「彼は一泊しただけで街を出て行ってしまったらしいが、街道に出る橋の衛兵の話によると彼はここから南西の水の街『ウィークス』に向かったようだ」

「よし！！これで次の行き先が決ったなッ」

なんだかんだいって、ルノアンの「南に行こう」という考えは間違いではなかった。

次の目的地がはつきりした二人は、もう一泊セシーリアの世話になることになり、各々就寝についたのだった。

扉をノックする音に気がついたのは、おそらく真夜中すぎ辺りであろつ。

飛び上がるように起き上がったシュトラウスは、半分しか瞼が開かない状態で部屋の鍵を開けた。

「誰だ——」

寝ぼけていたシュトラウスの頭は一気に覚めた。

薄くふんわりとした生地 of 寝巻きにガウンを羽織った姿のセシーリアが廊下に立っていたのである。昼間の彼女よりも薄暗い中の彼女は実に艶かしかった。

顔を真っ赤にして慌てたシュトラウスだったが、セシーリアがとても困った表情を浮かべていることに気がついた。

「どうしたんですか？」

「そ、それがだな……今夜も気配がするんだ——誰かの」

「え！？でも、あの魔族はもう……」

「私もわたくしそう思ったのだが、やはり前と同じ気配だと……思う」

困惑した表情の中には怯えが見える。

シュトラウスは急いで部屋に戻ると愛用の剣を手に、セシーリアの寝室へと向かった。

途中で二人の話し声で起きたのか、隣の部屋で寝ていたルノアンもやってきた。

「もしかしたら、あの魔族は関係なく、他に犯人がいるのかもしれないな」

幼馴染の言葉に頷くと、シュトラウスは寝室の中をゆっくりと開いた扉から覗いた。

さっと視線を窓に向けると、カーテンに何か動く影がある。

「……ルノアン、外からいくぞ」
「ああ」

セシーリアをその場に残し、二人は静かに、迅速にバラ庭に出る。

ちょうどセシーリアの寝室のあたりに、何かが壁にくっつくように中の様子を窺っていた。

「私にまかせろ」

ルノアンは杖を取り出すと、それを塊に向けた。

「遙かなる風よ、至れ」

杖から噴出した風が塊を一瞬で持ち上げると、そのまま塊は地面に落ちた。

塊のなんともなさけないが上がる一方、シュトラウスは塊に向かって突進し、その顔の見えないフードの中に向けて刃を向けた。

「てめえか！セシーリア様を不安に陥れていた元凶はッ！！」

剣を向けられても逃げようとする塊。シュトラウスは威嚇のために塊の上着を切りつけた。

「それ以上動いたら、今度はてめえ自身を切り裂いてやるぞ」

セシーリアにストーカーまが擬いのことをして、尚且つこの期に及んで逃げ出そうとする根性にシュトラウスは頭にきていた。

だからこそ、彼は緊張感が一気に抜けてしまった――

「す、すまんケロ！あ、ああああ謝るから、どうか切らないでケロッ」

という、実に独特な言葉遣いのせいで………

第10話 不思議な存在

剣の切っ先でゆつくりと塊のフードを上げてみたシュトラウスだったが――

彼は目の前に現れた顔に驚嘆した。

緑のテカテカした皮膚に大きなぎょろりとした瞳。口元は無機質に笑みをつくっている。

それは紛れもなく彼が幼い頃に一度は捕まえたことのある両生類であり、それ以外にはとうてい見えなかった。

「か、カエルっ！！！？？」

カエル。それ以外に見えるものがあるならば、一度医者に見てもらうべきだ。

カエルはシュトラウスの言葉に反応を示すと、いきなり頭突きをしてきた。

「あだツー！」

「僕はカエルなんかじゃないケロ！れっきとした人間だケロー！」

シュトラウスとカエルとの身長さの関係で、頭突きはシュトラウスの顎に上手く当たった。痺れる顎のせいで上手く怒鳴れなかったので、彼は思い切りカエルの上着を掴みあげて己の視線と同じ高さに合わせて。……カエルなのに、なぜか衣服はちゃんと着ている。

「おまひえの、どひよが、にんげんらってんだッ！……！」

「しゃべるカエルなんてそうそういないケロ！なんなら計算でも読み書きだって、なんだってしてやるケロ！」

「ほんひゃら、おまひえは、まものらっ！……！」

「こんな愛らしい魔物がいるものかケロ！」

「どひよが！？」

ルノアンはカエルに手を差し出した。

「すまない。私の幼馴染が無礼なことを言って。

私はルノアン・ハーティア。良ければ貴方の名前も教えてくれ」

カエルは名前を尋ねられ、慌てた様子を見せた。

「ぼ、僕の名前、ケロ？」

えーと、えーと、僕は、サリエムだケロ」

両生類の表情など読み取ったことはなかったが、声色からどこか嬉しげであった。

「あんたなら『サリー』って呼んでいいケロ」

「そうか。よろしく、サリー……「じゃねえだろうが！……！」」

いつもながらマイペースのルノアンの頭をはたく。

「サリーだかカエルだか知らねえが、セシーリア様にストーカーするとは良い度胸だな、カエル！！！」

「だからカエルじゃないって言ってるケロツ！！！」

それに僕はストーカーなんて悪趣味は好きじゃないケロ！！！」

「じゃあなんで女性の寝室の外の壁にくっついてたんだよ！通りすがりとか言ったらぶった切るぞ」

「そ、それは、事情というものがあるんだケロ……っ」

「カエルに事情も糞もあるか！！」

「カエルだって日々精一杯生きてるケロ！カエルだって傷つくんだケロ！なんて残酷で傲慢な台詞ケロ！！！」

「……サリー、それは己がカエルと認めているのか……？」

カエル——ではなく、サリエムに顔を近づけるシュトラウスの気迫に、哀れな生き物は怯えた。

「ぼ、僕はただ、皆の無事を確認してただけケロ……っ」

「は？無事？皆？」

サリエムは深く頷くと、なぜだか胸を張った。

「女性の魂を喰らって自分の美しさを保とうとする魔族『オルティス』が、この街の近くにいるということが分かったから、僕が狙われそうな女性を見張ってたんだケロ!!」

「何!？」

誇らしげなサリエムに、ルノアンは首を傾げる。

「なぜお前がそんなことをするんだ？」

カエルはそこで言葉を詰まらせた。

「そ、それは……ちょっと人に頼まれているんだケロ。」

……この街で一番綺麗なのはこの屋敷の女の人だったケロから、毎晩ここに来てたんだケロ。怖い思いをさせていたということは、本当に申し訳ないんだケロ。今日はいなくなつた女の人たちの無事を確認してただけなんだケロ。もうここには来ないケロ。約束する」

神妙な顔……だったのかは分かりにくかったが、それでも彼の誠意は伝わった。

サリエムとしては悪意は全くなかったのであろう。

「つーか、誰だよ、その頼んだヤツってのは？」

「い、言わないケロ」

シュトラウスが睨みつけてもさすがにそこまでは口を開いてくれ

ない。なかなか頑固のようだ。

「ま、カエルの事情なんてどーでもいいが……お前、セシーリア様や他の女性が狙われないか見張ってたんだろ？結局役に立ってねーじゃん」

昨夜のことは頭の痛い展開ではあったものの、魔族を追い払ったのは一応シュトラウスたちである。ストーカー紛いなことをしていたカエルではない。

それにはサリエムも思うところがあるらしく、

「い、一応昨晚はあんたたちの傍に僕もいたんだケロ。」

でも、僕は元々戦える力なんて持ってないんだケロ。そもそも、魔王とやり合う気には流石になれないケロ」

そこまでサリエムがいうと、突然シュトラウスが大笑いし始めた。

いきなりだったので、サリエムは一瞬びびってしまった。

「な、なんか可笑しなこと、いったケロか？」

シュトラウスはお腹を押さえながら、サリエムを指差した。

「お、お前さ。昨日のアイツ、マジで『魔王』とか思ってんの!？」

「……は？」

「お前、昨日の夜庭にいたんだろ？」

あんな新妻姿の魔王様ってヤツがいるわけねーだろ。ありゃ、た

だの変態だ、変態。変質者ってヤツだぜ」

「しかし、空間移動の魔術を使うとはなかなかできる芸当ではないぞ？正直言って、王宮魔術師の中でも1人しかおらん。ただの変態というのは失礼だ。高魔術の扱える変態にしろ」

「変わんねえよ。結局、本質は変態だってことだろ」

「いや、変態であつてもあの魔術、尊敬に値する変態だ」

「…………… あんたたち、変態連発しすぎだケロ。恐れ多くも魔族のトップにそこまでいえるヤツもなかなかいないと思うケロ」

サリエムはため息をつくと二人に向き直った。

そして生徒に語りかける教師のように話し始めた。

「あんたたち、魔王ロンバディウムといったら、銀色の長髪に赤眼なんて、人間にしてはありえない配色してるって知らないのかケロ。それに赤眼は非常に強い魔力を持っている証。少なくともただものじゃないことは確かケロ。」

それに魔族『オルティス』は魔族の中でも高位の魔族。そのオルティスがへつらってるケロから、彼女よりも強い魔族ということケロ。

以上から、いくら格好が悪くても、あいつは『魔王ロンバディウム』なのケロッ！」

そこまで言い切ったのは良かったのだが、サリエムはシュトラウ

スたちが全く自分の話を聞いていないことに気がついた。

「お前さつきから『ケロケロ』煩いんだけど、どーにかなんないわけ？」

「サリー。お前、人間なのだろう？なぜそんな姿をしているんだ」

「ルノアン、今更それ聞くか？つーか、どうせコイツ、元からカエルだぜ。いちいちケロケロいってんだもん」

「だが、本人が『人間』だと言っているなら、温かい目で見守ってやるべきではないか」

「お前結局、こいつがカエルだと思ってるんじゃないかよ」

「黙れケロ——ッ！！！！」

流石にカエルが叫び声を上げたのでシュトラウスたちはその気におされて黙った。サリエムの緑の艶やかな顔が、真っ赤になっていた。

「僕はもういくケロ。あんたたちとは付き合っていられないケロ！」

そして一声啼くと、彼はジャンプしながら闇の中に……ではなく、ちゃんと歩いて屋敷の門の方に向かっていった。しまった。

エプロン姿の魔王とやらよりも、よっぽどカエルの歩行姿の方が衝撃的かもしれない。

「結局、あいつはなんだったわけ？」

シュトラウスの問いにルノアンは肩をすくめた。

「さあ。ただ、敵ではなさそうだ」

「まあな。つか、あんな力エルが敵だったら、俺嫌だなあー」

夜空はまだまだ星を宿している。

シュトラウスたちは屋敷の中で待っているセーリアの元へと戻って行った。

第10話 不思議な存在（後書き）

言葉遣いが（とても）おかしいカエルさんの登場でした。
彼はちよくちよくでると思うので、よろしく願います。
またもや会話だらけになってしまって申し訳ないです。

第11話 出立の朝

勇者の足取りも、街での誘拐事件も、そしてセシーリアのストーリー問題も、なんとかシュトラウスたちは片付けることができた。その彼らには、これ以上街に滞在する理由はない。

シュトラウスとルノアンはバラの庭が美しい屋敷の門の前で、奥方がやってくるのを待っていた。

出立の朝だった。

セシーリアよりも先に、赤いストライプの入った白いワンピースを着たルヴィが、大きな荷物を持ってやってきた。

見たところ旅行用の鞆のようで、小柄な彼女には少々大きすぎる。ふらつきながらも、ルヴィはなんとか荷物を二人の前まで運び終えた。

「おはようございます!」

ルヴィの笑顔は朝からとても気持ちいいものだ。清々しい気分でシュトラウスも挨拶を返す。

「おはよう、ルヴィ。今日はやけに荷物が多いが、どうしたんだ?」

「わたしですか? 前からの予定で、今日からお薬の先生の下で修業しに行くんですよ」

「君の家は薬屋だもんな。
だが、誘拐されたのによくおっちゃんたちが許したな」

あれほど取り乱して娘を心配していた親たちだ。昨日も朝から屋敷にやってきて、なんどもノース夫妻にお礼を言われたていた。それなのに、娘が戻ってきて二日も経たないうちに余所へ行かせることができるだろうか。

ルヴィは得意げな顔を見せた。

「それはですね…」

「剣士の兄ちゃん！」

丁度呼ばれて振り向くと、まさしくノース夫妻がやってきているところだった。

薬屋の主人はシュトラウスとルノアンに盛大な包容をすると、娘にそっくりな笑みを見せた。

「本当にあんたたちはいい人だよ！
ルヴィを救ってくれただけじゃなく、街まで連れていってくれる
だなんて！」

二人揃って目を見開いたシュトラウスとルノアンは、ルヴィの方に振り返った。

少女はぱちりと小さくウィンクをする。

「勇者様もルヴィの先生がいる『ウィークス』に向かったんだろ？
なにかの運命なのかね。」

二人ならルヴィを任せても安心だし！」

ノースの妻、カエラも深く頷いている。

「あ、いや……」

何かを言おうとしたシュトラウスを遮ったのは、やっと現れたセーリアであった。

優しいクリーム色のドレスを身に纏った彼女は、遅れてしまったことを謝ると薬屋夫婦の方に顔を向けた。

「ノース、カエラ、お前たちはそろそろ店を開けなければならないだろう？」

ルヴィのことならシュトラウス殿たちにまかせておけば大丈夫だ。お前たちも一度近々休みを取って、『ウィークス』に行くのだろう？ すぐ会える。見送りは私が最後までちゃんとする。さあ、早く戻りなさい」

そう促され、ノースとカエラは二、三度娘を強く抱きしめて、しばらくの別れを告げた。

店に戻るノースたちを見つめていたシュトラウスは、ルヴィを軽く睨んだ。

「どーいうことだよ、ルヴィ」

彼を見上げたルヴィはぺろりと舌を出した。

「だって、わたしどうしても先生のところで勉強したかったんですもん。でも、事件のせいでお父さんたちが行くことを反対し始めて……。折角のチャンスがなくなっちゃうなんて嫌だったんです。ずっと前から楽しみにしていたし……」

「そこで」

言葉を繋いだのはセーリアだった。

彼女はいたずらっぽく笑った。

「私がルヴィに、ノースたちを説得する術を教えてあげたんだ」

彼女の笑顔が眩しいのはシュトラウスだけだろうか。

「……それで、私たちが街まで送り届けるということにしたんですね」

「すまない。私としては、ぜひルヴィの願いを叶えてあげたいのだからいきなり言われて困ると思うが、どうか……」

シュトラウスはセーリアの手を取ると、強く握り締めた。

「いえ！ルヴィのことは俺たちに任せてください！絶対送り届けて見せます！！」

彼の心情的には愛しい王女を護る騎士のつもりなのだろうか。ルノアンはやれやれと肩をすくめた。

「まあ、行き先が同じなら一緒に行った方がいいでしょうしね」

「ありがとう。街までは馬車を使ってくれ。チケットは手配してあるんだ。私からのせめてものプレゼントだと思って受け取ってくれ」

そこでシュトラウスは、セーリアが犬を抱えていることに気がついた。

赤茶色をした小型犬だ。犬は大人しく主人の腕に抱えられている。

「セーリア様は、犬を飼ってらしたんですね」

彼女はくすり、と笑顔を零した。

「ああ……ところで、この子、誰かに似ていないか？」

くりつとした円らな瞳。真っ黒な湿った鼻。少し反ったヒゲ。愛嬌のある垂れた耳。赤茶の癖のある毛並み。
なぜだかあまり可愛いと思えない。

シュトラウスは首をかしげた。

「さあ……」

だがルノアンは手を叩くと、犬に突き出した指をシュトラウスに向けた。

「お前だ！」

「おいおい」

呆れたシュトラウスだったが、セーリアの顔を見た瞬間固まった。

彼女が嬉しそうな顔をしたからだ。

「そうだ。さすがルノアン殿。シュトラウス殿と付き合いが長いだけあるのだな」

「いえいえ。実は前からヤツは犬顔じゃないかと思っていたところでした……」

「ふふ、だからだ。シュトラウス殿を初めて見たときに、他人に出会った気がしなかったのは」

優しく犬を撫でる細い指。

だが、実際シュトラウスは犬ではない。死ぬほどそれが羨ましくても、やはり嬉しくはない。

「この犬のおかげで夫人に出会えたのだから、感謝しておけ」

そうルノアンに言われても、やっぱり感謝する気にはなれなかった。

街道の街の乗合馬車・停留所。

店はほとんど営まれていて、ひとの往来も多い。だが、乗合馬車に乗る人はどうやらシュトラウスたちだけだったようだった。

シュトラウス、ルノアン、そしてルヴィ。三人が馬車に乗り込むと、セーリアは小包をシュトラウスに手渡した。

「お弁当だ。料理長ではなく私が作ったからあまり美味しく知れないかもしれないが、よかつたら皆で食べてくれ」

彼女はシュトラウスとルノアンの手を握ると、優しい眼差しを向けた。

「二人には改めてお礼を言いたい。本当に、ありがとう。」

もし私で出来ることがあれば、いつでも助けになる。こう見えても遠いところにも知り合いが多い。手紙でも送ってくれば、この街からでも少しは役に立てると思う」

「俺たちもセシーリア様にはお世話になりました。またこの街に来る機会があったら、絶対に会いに行きますね」

「夫人、お心遣いありがとうございます」

セシーリアはルヴィに視線を移す。

「ルヴィ、お前の夢のために、頑張るんだぞ。身体だけには気をつけなさい」

「はい！……また、セシーリア様に会いに行きますね。そしたら一緒にお茶、飲みましょうね」

ルヴィの瞳は薄っすらと濡れていた。

御者が馬車の扉を閉める。

それでも三人は窓ガラスから離れなかった。

くぐもった声だったが、美しい声が響いた。

「三人とも、頑張るんだぞ！」

それぞれは、しっかりとその言葉に頷いた。

第11話 出立の朝（後書き）

思ったより出発が遅くなりました。
次は多分、また新しい人が出る予定です。

第12話 夢の中の声

「……………なんでだよ……………」

子供の声だった。

「うそつき、うそつき……………」

ゆっくりと瞼を開ける。辺りは青暗かった。

「約束……………やぶった……………うそつきだ……………」

それは切ない眩きだった。
だが、辺りを見渡しても何も見えない。果てしない世界が続いて
いるだけだ。

ゆっくりと一步を踏み出す。ちゃんと歩いているはずなのに、視
界がふらふらと定まらない。

——…どこに
いるんだ？

「きらいだ、きらいだ、きらいだ、……」

——…どこ
なんだ？

問うても、こたえは返ってこない。

「うそつきうそつきうそつき」

頭が痛い。眩暈がする。

「裏切り者、裏切り者……ッ！」

吐き気がする。

「……殺してやる……」

「……………ッ!」

目を見開く。視界はぼやけていた。

「起きたのか、シュトラウス?」

馴染み深い声。

シュトラウスはそこで深く息を吐いた。

「どうしたんだ？汗がすごいぞ」

額に掌をあてるとそこはぐっしりと濡れていた。額だけじゃない、首筋も腕も、身体じゅうが冷たい汗をかいていた。

ゆっくりと鮮明になる視界で、群青の瞳が心配そうに自分を見つめている。

シュトラウスは袖で汗を拭うと肩をすくめた。

「なんでもない。ちょっと、変な夢みただけだ」

「本当か？」

ルノアンは半信半疑といった風に見つめてくる。

「本当だ」

嘘は言っていない。

シュトラウスは話題をかえるようにルヴィに視線を向けた。

向かいの座席に座っている赤毛の少女は、背もたれに寄りかかって眠っている。長い間馬車に乗っていて疲れたのだろう。身じろぎ一つしない。

「ルヴィも寝てたんだな。その間、お前、暇だったんじゃないか？」

納得のいかない様子のルノアンだったが、彼はあえて同じことを言わなかった。

その代わり、手に持っていた本を掲げた。

「ちょうど良い読書時間になった。

……そろそろ街との中間地点になる村につくはずだ。それまで、外の風景でも見ていたらどうだ。なんだったら、話し相手になるが」

「……………」

シュトラウスは首の後ろを掻いた。

「いや……のんびり景色でも見ているさ。お前は読書を続けてろよ。ま、馬車酔いしない程度にな」

ルノアンは素直に頷くと読書を再開した。

その姿を少し眺めていたシュトラウスだったが、座席に強張っていた背を預けると窓枠に肘をつけ手に顎をのせて、朱に染まってく空を眺めた。雲もだんだんとオレンジ色になっていく。

「殺してやる」

ふざけて言ったのではない。きっと、本当に殺すつもりで言ったんだ。

「またかよ……」

いったい誰の心の叫びだったのだろうか。

シュトラウスは掌に顔を埋めた。

「ああああッ！！！！！！！！」

馬車の中まで響く叫びに、シュトラウスは顔を上げた。

「何だ？」

ルノアンを見ても、彼はただ首を横に振るだけだった。
恐らく御者の男の声だった。

シュトラウスは御者台を覗ける小窓に顔を近づけたが、様子を窺う前に馬車が急停止をした。反動で身体が浮く。

「うわぁー！！」

流石に目覚めたルヴィも含め、三人は馬車の壁に頭や肩をぶつけるはめになった。

シュトラウスは脇腹を摩りながら馬車の扉を蹴り開けると、転がるように外に跳びだした。

「御者のおっさん!？」

乾いた土の上に男が倒れている。乗車の際、にこやかな笑みを浮かべていた瞳は閉じられていた。

慌てて傍によって口元に手を翳す。

息はある。

しかしほっと息をついたのも束の間だった。

シュトラウスは気配を感じてとっさに御者の身体の上に折り重なるように身を伏せた。

頭上を大きな影が素早く、風の唸りを上げて通り過ぎた。

「シュトラウス、上だッ!!」

その声に反応してとっさに御者を腕に抱えると、そのままその場から無理やり離れた。

轟音と風の中、たった今シュトラウスと御者がいた場所には、赤黒い皮膚が張り付いた太い尻尾が突き刺さっていた。移動していなかったら確実に二人は串刺しになっていただろう。

馬たちの悲鳴が聞こえる。

朱の光の中に、馬車よりも三倍は大きい生き物が立っていた。

姿はトカゲを大きくしたような生き物だ。だが、トカゲよりも大きな目と大きな口から覗く鋭い歯は、シュトラウスを威嚇するように攻撃的だった。

一瞬ルノアンに視線を向けると、彼はルヴィを抱えて馬車の傍に立っていた。

「ルヴィとおっさんを、安全なところまで！」

「了解したッ」

腰から素早く剣を引き抜き魔族に剣先を向ける。首がいたくなる程見上げなければならない相手だ。

だが、こういう相手と一人で戦ったことは何度かある。どうにもならない相手、というわけではないはずだ。

魔物が再び尻尾を振りかざしてくる。

だが魔物は身体が大きすぎて若干動作が鈍い。シュトラウスは魔物の正面に回り込み、一度腹に切りかかる。

劈くような叫びが上がるが、それでも彼の一撃は浅いと言えなかった。とてもじゃないが、致命傷にはならない。

怒り狂う魔物は足踏みをする。地面が微かに揺れた。

シュトラウスは今度、尻尾の付け根を狙うために襲い掛かって来た尻尾を避けると、付け根に思い切り刃を突き刺した。

「ギョエ——ッ！！！！」

刺した感触が消える。

同時に腹部に鈍痛が走った。

「シュトラウスッ！！！」

魔物の尾で吹き飛ばされたシュトラウスは、地面に叩きつけられた衝撃で肩と左足を強く痛めてしまった。反応したくても、身体が言うことを聞かない。

「炎帝よッ！」

焦げ臭い匂いが立ち上る。

痛みを堪えて身体を起こすと、炎に包まれている魔物の姿がそこにあった。

だが——

やがて炎は消え、何事もなかったように魔物はルノアンの目の前に立っていた。

「な、ぜだ……っ？」

逃げる。

そう叫ぶ前にルノアンは吹き跳ばされた。
子供たちが遊びで小石を投げるように、「物」のように。それは
いとも容易く宙に跳んだ。

血の気が、引いた。

「ルノアンッ！！！！？」

痛みが感じられなかった。

ただその時はとにかく夢中で、シュトラウスは剣士としては大変
な失態をしでかした。

剣を置き去りにして、ルノアンのもとに走ったのだ。

「ルノアン！」

地面に倒れている青年を抱き起こす。彼の口からは血が零れてい
た。

だが、ルノアンに意識はあった。

「馬鹿……者。私よりも先に……」
「しゃべるなッ！！」

だが、魔物は既に二人の真後ろにいた。

振り返る暇がないのは分かっていた。

ただ強く、幼馴染を護るように腕に力を込めた。

「雷神の加護を与え給え！」

誰かがシュトラウスたちと魔物間に割り込んだ気配がするのと同じ時。

声になっていない叫び声が黄昏の空に響いた。

「お前……は……」

微かにルノアンがそう呟き喘いだ。

後ろを振り向いたシュトラウスは驚愕に眼を睜らせた。

恐らく女性が――手に持った棒のようなものを、シュトラウスが魔物の尾の付け根に刺した剣に当てていた。ただそれだけだった。

だが、魔物は身体は一切の動きを止め、その瞳はだんだんと白く濁っていく。

そしてとうとう、大きな身体は力を失い地響きを立てて崩れ落ちた。砂埃に辺りが覆われるが、女性が長い棒を下ろしたのが分かった。

「大丈夫ですかッ!？」

ルヴィが真つ青な顔で走ってきた。

シュトラウスはゆっくりとルノアンを地面に横たえた。

意識はあるが、怪我の方は良くなかった。シュトラウス自身は打撲ですんだようだったが、ルノアンは最悪、骨が折れているかもしれない。ローブの袖をまくった腕が赤く腫れていた。

「添え木をしないと……。ったく、お前、ちゃんと逃げろよなッ!」

八つ当たりなのは分かっていたが、言わずにはいられなかった。

ルノアンは困ったように笑う。

「悪い。どうも運動神経は昔から良くなくなってな……」

ルヴィが肩から提げていた鞆から皮袋を取り出し、その中から薬草を出した。

「助かるよ、ルヴィ」

「いいんです。それよりも、早くルノアンさんの手当てをしないと……」

だがルヴィは薬草を腫れた腕に当てると、その上から彼女の掌をあてがった。彼女はゆっくりと目を閉じた。

「ルヴィ？」

不思議そうなシュトラウスとルノアンをよそに、ルヴィは瞼を閉じたままじっとして動かない。

ルノアンは驚きの声を上げた。

「温かい……。……もしかして、ルヴィは……」

ルヴィの掌から温かい光が溢れる。

傍にいたシュトラウスもその光が心地好いことに気がついた。

「治癒師ね」

いつのまにか女性が三人の隣に立っていた。
近くで見るとまだ少女といっても良い程の年齢だということが分かった。

「その歳で治療専門の魔法が使えるなんてすごいわ。才能あるのね」
褒め言葉にルヴィは顔を赤く染めた。

「そ、そんなことないです。わたし、薬草を使わないと治療できませんし……。」

それに本当の治療師はもっと早く、しっかり傷を癒せますけれど、わたしではその人自身が持つ回復能力を高めることしかできません」
「ううん。魔術師も治療魔法は使えるけれど、治療師に比べたらほんの初歩程度しか扱えないもの。魔術師に比べて治療師は本当に少ないしね」

「へえ……すごいじゃないか、ルヴィ」

ルヴィは先ほどよりももっと真っ赤になりながら首を振った。こういう所は本当に可愛い少女だ。

「ところで、あんたにはお礼を言わなきゃな。
俺はシュトラウス。助けてくれて有難う」

手を隣にいた少女に突き出すと、彼女は数回瞬きしてその手を見つめた。

彼女は肩にかかっていた金髪を後ろに払った。

「別に、お礼を言われるものではないわ。ただ、知った顔があったから、ちよつと手を出してみただけ」

「え？」

少女は出したままのシュトラウスの手を握ると、微笑んだ。

「まあ、名前を覚えてもらって名乗らないのも失礼ね。

わたしはクリスティーナ・アリス・オルブライト。クリスって呼んでね」

背中まである金髪 of 髪に青い瞳をしている、なかなか綺麗な女の子である。

おかげで、本当にこの子が魔物を倒したのか首を捻りたくなる。

急にクリスティーナ……クリスは完治とはいえなくても、腕を癒してもらったルノアンのローブの胸元を掴むと、そのまま自分の顔に近づけた。

一瞬キスでも目の前で始めるつもりなのかと、驚いてシュトラウスとルヴィが見ている中、クリスはルノアンの額に……………

——ゴンッ！

頭突きをかました。

第12話 夢の中の声（後書き）

分かりづらい場面があるんじゃないかといつもひやひやしています。
今回みたいな戦いっぽいシーンは特に…。

第13話 憂鬱な魔術師たち

「10ヶ月と6日目……長かったわ……」

……よくもこのわたしから逃げだしたわねッ！」

胸倉を掴んでルノアンを睨みつけるクリスの声にはすごみがかかっていた。

一方ルノアンは弱りきった表情でそれを見返していた。手をあてている額は真つ赤になっている。

……少女の方に被害がなさそうなのが不思議だが。

「久しぶりに会ったのに頭突きはないぞ」

「知るか！」

怒ったクリスはルノアンを前後に激しく揺さぶる。

驚いて成り行きを見つめていたシュトラウスだったが、一応怪我をしていた幼馴染のために二人の間に割ってはいる。

「なんかよくわかんねえけど、クリス、手を離してやってくれないか」

クリスはそう言われてしぶしぶルノアンから離れる。

ルノアンの手当てを済ませていたルヴィが、大きく目を見開いて尋ねた。

「お二人はお知り合いなんですね？」

二人の反応からして初対面なわけではないだろうが、それにしてもあまり良好な再会の様子には見えない。再会して頭突きが挨拶とは、随分な間柄に違いない。

ただ、幼馴染であるシュトラウスには覚えのない少女であることは確かだ。

ルノアンは肩を竦めた。

「ああ。彼女は私が魔術を学ぶために学校を通っていた時の同級生なんだ」

「じゃあ、クリスも魔術師なのか！？」

長いこと幼馴染をやってきた二人だったが、あまりお互いが会えなかった時期があった。それはルノアンが魔術学校に通っていたために4、5年の間、彼の休みの時しか遊べなかった時だ。シュトラウスとしてはなぜ学校に行つて勉強などするのか理解できなかった。

だから、あえてシュトラウスがルノアンの勉強について話を聞くことはなく、ルノアンも学校のことは特に話すことがなかった。

そのため、クリスのような少女が同級生にいるということも聞いたことはなかったのだ。

「何よ、わたしが魔術師やってちゃ何か可笑しいかしら？」

「いやいや、そういうわけじゃないけどさ……。でも、さっき魔物を倒した時には……棒……だろ？使ってたのは。魔法使ってたのよな？」

そしてちらりと手にしている彼女の背丈ほどある棒に視線を向けた。

棒といっても、ルノアンが持っているような装飾のある杖を長くしたもののように、精巧に作られた銀色の武器だ。所々に石が嵌められている。

クリスはシュトラウスの鼻先に細い指を突きつけた。表情は呆れ顔だ。

「貴方の目は節穴？ちゃんと使ってたわよ、ま・ほ・う」

「え……？」

クリスはにやりと笑う。

「えーと、シュトラウス、だっけ？貴方のおかげでね、魔物の身体の中まで雷の魔法が行き渡ってくれたわ」

「んん？」

「つまりだな」

ルノアンがクリスのこたえを補足する。

「クリスにとってその棒は私の杖のようなものなんだ。

彼女は先ほど雷の魔法を詠唱してその棒から、魔物に突き刺した

お前の剣を伝つて、魔物の身体の中から攻撃をしたというわけだ。
まあ……傷口を痺れで抉つてやったというわけか」

なる程、とシュトラウスは手を軽く合わせた。

だからクリスは手にしていた棒を剣に当てていたのか。
だが、なぜ彼女は杖を使わないのだろうか。仮にも魔術師という
ならば、身体を張る必要はないはずだ。

シュトラウスの疑問はクリス自身が再び手にしていた棒をルノア
ンに突きつけたことで本人に尋ねることはできなくなった。

「そういえば、あんたなんでこんな所にいるのよ！わたしから逃げ
出して王宮付きの魔術師になつたんでしょっ？」

ルノアンはなんとも微妙な表情をした。困っているような、どう
したらいいのか分からないような……

「逃げたつもりはないのだが……ただ、卒業はどうにもできないだ
ろう。それで逃げたと言われても……」

「卒業が何よ！だいたい、あんたがマキューズ先生との仕事を選べ
ばよかったんじゃない！」

「それは……もちろん、先生との仕事には興味はあつたし、正直、
王宮での仕事と迷つてはいたが……」

そこでちらりと棒を顔に突き出しているクリスを見上げた。

「何よ？」

眉尻を下げて弱り顔のルノアンが、息を吐くように言う。

「……クリスが言ったではないか。『あんと卒業してからも一緒になんて冗談じゃない！』って……」

「……………」

話を聞けばルノアンの同級生であつたクリスは、現在その魔術師のマキユーズ先生とやらの下で働いているらしい。

それは確かに、先生とやらのもとでルノアンが仕事をすることは彼とクリスが一緒に働くことを意味する。それなのにそれを拒んだクリスがルノアンの選択を問い詰めるのは可笑しな話である。

だが自分が不利だと気づいた彼女はいきなり、

「そもそも、あんたが女の子じゃなかったのがいけなかったのよッ
！！」

と、言い出した。

「何分けわかないこといつてんだ？」

あまりに突拍子のない、悔し紛れの言葉に、シュトラウスは笑つてしまった。

確かに、ルノアンの容姿なら女装しても違和感がなさそうではあ

るが……

ルノアンは馴れた様に、だかはつきりと言った。

「だから、勘違いをしていたのはクリス、お前だ。私は一言も『女』だと名乗ったことはない」

「だからって……だからって……あんなに可愛くて綺麗な女の子を目の前にしたら、男なんて思わないでしょ！？恋は盲目って言うのよ！気づかないわよ！」

「……………」

何をいつてるんだ、この女。

ルノアンはその理解できない言葉の羅列に普通に対処する。

「だから、女の子ではないと言っているだろうが。それに、クリスの『恋』とやらは、少々偏った趣味であるような気がするんだが……」

「なんですって！？女の子が可愛いつて思う気持ちのどこが偏った

趣味なのよ！男だったら、女の子可愛いつて思う時があるでしょッ？それと同じよ！」

「うーん……だが、少女に対するお前の反応は少し……怖いぞ」

「なんですって！？わたしはねえ……」

すると突然クリスが二人のやり取りを見守っていたルヴィの方に振り向くと、抱きついた。

身長の高い彼女がルヴィを抱きしめると、少女はすっぱり腕の中に納ってしまう。

ルヴィはいきなりのもので、目を瞬かせてクリスを見上げていた。

「うう、もう幸せー。ふかふかふわふわ、すつごく心地良いー！」

見れば今までであった綺麗な顔が一転、だらしく緩んでいた。

しかもクリスはルヴィを抱きしめて、不気味な笑みを浮かべたのだ。

ぶつちやけ、少女にいかげしい事をしようとする変態親父のようである。

本人のささやかな抵抗を無視してルヴィの感触を味わっていたクリスは表情を元に戻すと、

「っていつ、このわたしのどこが怖いのよ？」

「十分怖えーよ」

クリスが言い終わる前につつこんだシュトラウスは、引きつった表情でルヴィをクリスから離してやった。見ているだけでも少女の身の危険を感じる。

彼女といえは舌打ちをして、ちらりと一瞬シュトラウスに怨みの視線を送った。

「……………おい。お前の同級生はあれか、また変質者の類じゃないだろうな？」

「……………彼女はその……………」

「何だ？」

「……………女の子が、その……………大好きと言っか……………」

「……………」

「好みの女の子を見つけると見境がなくなると言っか……………」

「……………」

十分、変態だ。

シュトラウスは頭を抱えてしゃがみ込んだ。

なぜ、次から次へと変人が現れるのだろうか。そんなにも自分の行いは普段から良くないのだろうか——シュトラウスは項垂れた。

「まあ……私のことを一年くらいずっと女性だと思っていた人だから……」

ルノアンは空の果てを見つめるように半分氣力を失ったように呟く。

「……お前の容姿が勘違いされやすくて、ずっとは勘違いできないだろ」

ルノアンとクリスの様子からして浅い付き合いだとは思えない。とすれば、もちろん会話や仕草、体格やいろいろと女ではないと気がつく場面はいくらでもありそうであるし、普通は気づくはずだ。だが一年も勘違い続けられるとは、彼女はそうとうの鈍感か天然か。

彼女の台詞からして、ルノアンが「女」ではなかったことには相当のご立腹らしい。

「……………てゆーか、ルノアン、お前が勘違いに気づいて訂正してやれよ」

「……………」

振り向いたルノアンは妙に淡々と、

「勘違いされてるとは思わんだろ」

と、言った。

確かに、それはそうなのだが。

しかしどうにも、その時シュトラウスは違和感を感じた。
でもそれがなんなのか良く分からなかった。

「ま、感動の再会ってヤツもそのくらいにして、いい加減馬車に乗
ろうぜ。このままじゃ、本当に日が暮れちまう。村に着く前に夜に
なったら、さすがにさっきの魔物だけじゃすまなくなるかもしれない」

魔物の中には夜行性の生き物もいて、強い魔物ほど夜に行動した
がるのだ。

シュトラウスは気絶中の気の毒な御者に起きてもらうため、しか
たなく馬車から取り出した水筒を手に彼のもとに向かった。

第13話 憂鬱な魔術師たち（後書き）

このあとおっさんは水筒の中身を顔にかけられて起床します。

第14話 彼の人は何を想う

「へえー？あんなたち勇者グレイドル探してるんだ」

なんとか日暮れまでには、街までの休憩場所である村に着くことができた。その村で宿を借りたシュトラウスたちは、一室に集まってクリスに今までの経緯を話した。

寝台のうえに座っているクリスとルヴィに向き合うように、シュトラウスは背もたれが正面に来るような形で椅子に座っている。

「まあな。正直、ぜんつつぜんやる気なんかないけど」

シュトラウスとしてはもう旅行を楽しむつもりだった。仕事なのは分かるが、どうやら魔族に狙われているらしいというマイナス要素に匹敵するほどの仕事に結果が出るとは思えない。

だいたい、あてもなく人捜し出したところで、勇者が魔王を倒したくないヴァカンスしたいなんて言いだしたら、二人の苦労は水の泡という任務である。

シュトラウスとは反対側に座っていたルノアンが、クリスに尋ねた。

「おまえはどうなんだ？先生と一緒にじゃないが、頼まれごとでもされてこちらに用でもあったのか？というか、あんな何も無い場所です歩きとは危険極まりないと思うぞ」

ルノアンが言う通りで、クリスは日も暮れそうな時刻に馬車も馬もなく何も無い場所を歩き回っていたらしい。さすがにこれには皆

驚かされ、もしシュトラウスたちが通りがからなかったらいつたいどうやって夜を過ごすつもりだったのか皆目分からなかった。

クリスは多少嫌そうな表情を作ったが、しぶしぶとそれに答える。

「マキューズ先生はお先にあんたたちも向かつてる『水の街』に行っちゃったのよ。

しかも、わたしの乗っていた馬に逃げられちゃって、いやーもう、夜中歩き続ける覚悟だったんだけどね。あんたたちが乗ってた馬車を見かけてさ！

それで頑張つて走って馬車を止めようとしたところ魔物と遭遇つてわけね」

あははー、と簡単に笑っているクリスだが、本当にどうするつもりだったのだろうか。

「はあ……まあ、街まではおっさんをお願いして乗せて行ってもらえよ」

「当たり前よ！」

シュトラウスの言葉に元気よく答えるクリスだった。

そこでルヴィがにこにこ彼女を見上げた。

「じゃあ、クリスさんも街まで一緒にできるんですね。よろしくお願いします」

固まるクリス。

いや、この場合変態か。

彼女は頬を紅く染めると、両手を広げてルヴィに抱きつこうとする。

「ルヴィちゃん可愛いッ！！！」

予想通りのことに呆れ果ててしまう。

シュトラウスは瞬時に椅子を傾けて手を伸ばし、クリスの首根っこを掴んだ。

「おお。慣れるの早いな」

「いや、馴れる以前に次の行動が分かり易過ぎる」

じたばたするクリスを押さえつけ、余裕の表情で後ろを振り返って会話をするシュトラウス。その姿はどこか彼の人生における教訓が垣間見える。

クリスが諦めたと見たシュトラウスは手を離すと同時に椅子から立ち上がった。

扉の前まで行ったところで三人に振り向くと、

「ま、お子様は早く寝ろよ。俺は酒場にでも行ってくる」

そっぴい残して、部屋を出たのであった。

ルノアンを誘っても酒の弱い彼では飲酒どころか介抱の役回りをさせられそうであったし、一人酒を愉しみたいという気持ちもあった。

た。

それから――

――殺してやる……………

耳に残るその声が、未だに離れないから――

「何よ！お子様って歳でもないのにつ。
だいたい、歳だってそんなに変わらないくせに――！」

シュトラウスの言葉に憤慨しているクリスではあったが、それは
ルノアンも同じ思いであった。ただお酒を飲んでも迷惑しかかけな

いだろうことは自覚しているので、一緒についていっても仕方がない。

「何か温かい飲み物でも貰ってこようか？ミルクかココアでも……」

「あ、それじゃあわたしはココアをお願いします」

赤毛を揺らし軽く頭を下げるルヴィに微笑みながら、今度はクリスに顔を向ける。

「お前は――」

クリスはちらりとルノアンを見上げた。その真っ直ぐな眼差しが懐かしいと思えた。

「……お砂糖いっぱいがいい」

一瞬考え込んだルノアンだったが、すぐに頷いた。

「ああ、分かった」

クリスは何かと甘すぎる紅茶が好きであったのだ。

立ち上がったルノアンは、彼女がまだ何かを言いたげな顔をしていたことに気がついたが、あえて自分から聞く気はなかった。だからそのまま、部屋を出た。

廊下は静かだった。

人気が多い村とはいえず、観光名所があるわけでも、まして名が知られた場所でもない。旅行者がわざわざ泊まることもなく閑散としていた。

「リー」

反射的に振り向いた。

めったに呼ばれていない名前だった。

同時に、その名で呼ぶ者は限られている。

廊下の真ん中で、背筋を真つすぐに伸ばした女性がルノアンを見据えていた。

「……ルヴィがいては、都合の悪い話か？」

彼としてはめずらしく、おどけた様子に故意を含めて聞いた。

クリスはそのものいいに口端を引きつらせていたが、それでも我慢して尋ねてくる。

「別にどこでもいいわよ。ただ、あんたにはそろそろ、ちゃんとか分かってもらわないと思ったからっ」

「そう何度も言われなくても分かっている。私がクリスを騙していたと2、3年も言われ続けれという私の身になってくれ。」

だが、私はクリスが勘違いしていたとは知らなかったんだ。お前が私の性別を誤解していたことを恨みに思われても、私にはどうにもできん。そうだろうっ？」

そう言われてはクリスも言い返せないのか、ぐっと気持ちを堪えたように唇を噛んだ。

「……そりゃ、そこまで否定されて改めて考えれば、あんたがわざとそんなこと、するとは思わないけど……」

「……」

「あ——でも——！やっぱ納得いかない——！女の子なら申し分ないのいい——！」

本気で悔しがられるとは、こっちの方が納得がいかない。

だからルノアンはあっさり、

「期待に添えなくてすまん」

と答えてやった。

クリスは半眼で睨む。

「腹立つわねあんた相変わらず——！」

「はは」

ルノアンは苦笑にも似た笑みを零した。

するとなぜか、クリスが息を呑んだ。
凝視する青い眼にルノアンは首を傾げる。

「あんた、そんな風に笑ってたっけ…？」

「え……」

「だってなんか、今の顔と比べると昔は……」

その時二人の傍にあったドアが開いた。
中から馴れ合った男女が出てきて、いきなり目の前に現れたルノアンたちに戸惑っていた。

「それでは私は飲み物をとってくる」

「あつ、リー！待って……」

ルノアンは振り返らず、クリスの言葉の先を聞くことはなかった。

階段の軋みが嫌に耳に付いた。

「昔………か………」

第15話 槍を持つ男

酒場は盛り上がりを見せている。昼間の村からは想像出来ないほどの人口密度で、村の男たちはほとんどいるんじゃないかと思ってしまう。

シュトラウスは殆ど埋まっている席を見渡し、ひとつのスペースを見つけた。

もちろんそのテーブルには他の客がいたのだが、彼の目的には都合のいいことであつた。

シュトラウスがテーブルに近づくと、トランプゲームをしていた四人の男たち――日に焼けてガタイの良い男たちが顔を上げた。

「どーも。俺、初めてこの村に来ただけどさ、仲間に入れてくれないかなーって思ってるんだけど。どうかな？」

彼らは胡散臭いものを見るような眼差しを向ける。

肩を竦めたシュトラウスは、傍を通りかかった店員を呼び止めた。

「この人たちにお酒出してくれるか？」

口笛が上がった。

男たちは急に顔を緩めると、シュトラウスの肩を叩いて空いていた席に座らせた。

「兄ちゃん、太っ腹だな！ほら、あんたも一緒に賭けゴトしようぜ」
シュトラウスの前にも配られるカード。

それを手にして見れば、クズばかりだ。

頭を掻いて少し悩んだものの、シュトラウスはポケットからコインを取り出し、テーブルの上に放り投げた。

ゲームは始まったのだった。

欠伸が出た。もうさすがにルノアンたちは寝ているだろうか。シュトラウスはカードをテーブルに置いた。

「あーあ。また負けちまった」

ノーペアだ。ゲームを始めて二十数回、ほとんどワンペアが揃わないかのどちらかだった。

男たちもさすがにそこまで新参者が賭け事に弱いとは思っていなかったらしく、途中何度か掛け金を戻してくれた程だった。

シュトラウスの右に座っていた男が、慰めるように肩を叩いた。

「何でも上手いかない日はあるもんだ。気にすることはねえよ」

「そうかな？ そうだといいいんだけど……ところで、あんたたちって

「この村の人たちだよな」

「？ ああ、俺たちも周りにいる奴らもほとんどそうだけ。兄ちゃんみたいに若い男はだいたい村の外にいつちまうもんだ。ま、俺も若い頃はそうだったが……」

「ふーん。それじゃ、あんま年齢の低い子はこの村にはいないのか」

男は首肯した。

「はは。子供にや刺激の少なすぎる場所さ。出たがる子は多い。ま、元々この村に子供なんてそんなにいやしないよ」

「そんなに少ないの？」

「ガキつてもんは、8人くらいしかいないんだぜ。少ないないなんて話じゃないだろ？」

「仕方がないが、この村で腰を落着けようなんてやつは少ない。子供がいなくなるのも自然なことだ」

「ふーん……」

「思い出されるのは夢。」

「……いや、夢だったかどうかも疑わしい。だが、あの声は高く、幼い声。」

「年齢的には幼くて5歳、大きくて10歳くらいだというのがシュトラウスの見方だ。だが、こんなものが手がかりになるとは思えな

い。本人の声を聞いたら分かる自信はあるのだが……

しかし村に八人しか子供がいらないというなら、直接会って確かめられる人数だ。

幸いかどうかは別だが、この村の辺りには人が住むような場所はないし、幼い子供が遊びに来る場所でもないだろう。それならば、声の主は必然的に絞られる。

だからきつと、見つけ出せる——……

そうしてシュトラウスが思考に耽っていると、隣のテーブルがどつと沸いた。

興味が湧いて見てみると、大柄な男がもう一人の男の胸倉を掴んでいた。男の表情は髪がぼさぼさでよく見えない。背には年季の入ったいそうな槍ランスがあった。

始まった喧嘩に観客は止めるどころか彼らを囃はやし立てる。

「……離せ」

胸倉を掴まれていた男は目の前にあった手を払う。

だが大男は、今度は彼の前髪を掴んだ。

その時睨いた瞳に、シュトラウスは驚いた。いや、どちらかといえどズツとした、と言うべきか。

本来なら金色の瞳だろうと思われるのだが、それがどこか不自然な光を持っている。

濁っているわけではない。むしろ、どこかすっきりとし過ぎてい

る程だ。

だが、その目は見る者の心にどこか重いものを与える。

その男が腕を背に動かしたのが見えた。

「！」

シュトラウスは慌てて大男を呼び止めた。

「なんだ？」

もちろん不機嫌で気が立った男は、額に青筋を立てて振り向いたのだが、シュトラウスは怯むことなく明るい調子で言う。

「いや、折角この店は良いところなんだから、そういう騒ぎはよそ
うぜ」

「あ？お前に関係ねえだろーがッ」

今度はシュトラウスに大男の手が伸びる。

身軽にそれを見ると、よけいに大男は顔を歪ませた。

「ま、関係はないけど俺だってあんたと同じ『客』だからな。文句
を言う権利はあるぜ」

「権利だかなんだかしらねえけどうるせえよ！！！！」

赤ちゃんの頭ほどある拳がとんでくる。

シュトラウスは身体を反らせながらその腕を両手で掴むと、大男の勢いと己の背中を使って彼を壁に叩き付けた。テーブルや椅子がその拍子に引っくり返る。大男は動かなくなった。

周りが喚声の中、シュトラウスは気絶した男を見下ろした。

気絶とちよつとした打撲ですんだことを感謝してもらい所だ。：

…まあ、目覚めた時には憤怒の顔が彼に浮かぶだろうが……。

縫れた衣服を正していると、ぼさぼさ頭の男がすぐ近くに立っていることに気がついた。

大男に掴まれた際にそのまま立ち上がっている前髪のせいで、彼の眼の上に古傷が刻まれていたことに気がついた。

彼の眼は先ほどよりも穏やかで、澄んでいる。

「……止めてくれて助かった」

「まあ、自分がしようとしたことが分かっててそう言うなら俺が改めて言うことでもないかもしれないけどさ……あんまり感情だけに任せきりってのはやめたほうが良いんじゃないか？」

自分だって聖人ではあるまいし、感情には流されっぱなしの人間だとは自覚しているが、それでも前髪を掴まれてそれを振り払うために人を刺す気はない。

殺す気があったわけではないと思う。

それでも、男は背中の槍で大男の身体を貫くつもりはあったはず

だ。それはすなわち、殺すことと同義であつたと思う。あの瞳はそういう瞳だつた。

「そうだな、止めなければいけないな。自分で、終わりにしないと……」

伏せられた瞳。

男のその言葉は、シュトラウスの言葉を受けて口にしたものには聞こえなかった。ほとんど独り言であつただろう。

彼は軽くシュトラウスに頭を下げると、酒場を出て行つてしまった。その背中はどこか儚く感じさせた。

「兄ちゃん、後始末しておいたぜ」

声をかけられ振り向くと、トランプを一緒にしていた男たちが倒れたテーブルや椅子を元に戻したり、床に寝そべっている大男を店の隅に移動させたりしてくれていた。

「うわっ、ありがとな！」

「いーっていーって。面白いもん見せてもらった礼みたいなもんさ。さ、また賭けでもしようぜ」

折角の誘いではあつたが、流石に明日馬車が出発するのならそれまでに動ける時間はあまりない。最悪、シュトラウスだけでも後から街に行くことになるかもしれない。これ以上夜更かしはしない方がいいだろう。

「俺そろそろ宿に戻るわ。ごめんな」

「なんだ、寝るの早いぞ兄ちゃん！」

「悪いなあ」

もう一度お礼を言った後、笑いながら男たちに暇を告げる。

店員に少々高い出費を払い、店を後にする。酒場の外はとても静かだった。

背中から漏れる喧騒が、彼の場所からぴたりとなくなっているようだった。濃紺の空が、どこまでも続いていた。

シュトラウスはマントを羽織直すと、暗闇に一步踏み出した。

宿の部屋に戻ると、相部屋のルノアンがまだ起きていた。窓側のベッドの上で読書をしていた。

彼は帰ってきたシュトラウスの方を向かず、本を見つめたままだった。

「……酒の方は楽しめたか？」

シュトラウスは上着を椅子の背にかけると、空いていた方のベッドへうつ伏せに倒れこんだ。

「んー、まあまあ、かな」

ひとり酒はできなかったが、わいわいと飲むのもまた一興であった。

「……ルヴィが心配してたぞ。あまり飲むと身体に良くないって」

「はは、ルヴィはホントいい子だなあー」

「水でも貰ってくるか？」

今夜はやけに静かだ。シュトラウスはぼんやりとそう思った。

彼は倒れこんで目の前にある真っ白なシーツを見つめたまま呟いた。

「どうかしたか、ルノアン」

気にかけるような様子ではない。何が可笑しいと聞かれてはつきりとは答えられない。

それでも、父親以外で長く傍にいたのは彼であり、だからこそ感じるものの違いが分かるのだ。

聞いてみたものの、返事はなかった。

シュトラウスはそのまま目を瞑ると最後にもう一言だけ言った。

「おやすみ」

眠りに落ちる直前に、ルノアンは彼と同じ言葉を紡いでいた。

「おやすみ、シュトラウス」

第15話 槍を持つ男（後書き）

なんか雲行きが怪しいと言つか若干暗いというか。
次は女の子が出て華やかになるかと。……なったらいいな！。

第16話 朝のひととき

「……って、……い！」

夢の狭間で声がする。

まだ幼い女の子のものだ。

「……………いよ……………！」

眠くて眠くてたまらないシュトラウスにとって、その声は睡眠を邪魔するにも変わりなく、声の幼さに若干抵抗はあるが、それでも無視して眠り続ける。

「もう！朝……………ねな……………です！」

身体を揺すられた。煩わしいのでそれを払いのける。

「……………」

恐らく「彼女」が何もしないのを良いことに、シュトラウスは再び夢の中に帰還する。

「起きろって、聞こえないのかよこのくそ男」

夢か。

「いい加減起きないならその髪全部剃ってツルツパゲにすんぞボケ」

……夢、だよな。

「聞こえてるくせにシカトしてんじゃねえぞ」

シュトラウスは無言のまま起き上がった。

恐る恐ると顔を上げると……可愛い笑顔が待っていた。

「おはようございます、シュトラウスさん」

にっこり。

窓から見える青天の朝に相応しい清々しい笑み。

……のはず？

赤毛の少女にシュトラウスは顔を引きつらせて尋ねる。

「あのさールヴィ。いま、誰か別の人がいなかった？」

一瞬面を食らったような表情をしたルヴィだが、苦笑した。

「嫌ですね、そんな訳ないじゃないですか。

ルノアンさんもクリスさんも食堂でお待ちしてるんですよ？」

「そ、そうなんだ……？」

やっぱり夢だったのだろうか。

いや、それにしてもなんて生々しいというか………

「ほらほら、そんなこと言っていないで下に行きましょうよ」

「あ、ああ……」

どうしても釈然としないが、本能がそれ以上の追求を必死に食い止めようとする。

結局シュトラウスは素直に身支度を始めた。

「どうだった、ルヴィ。シュトラウスの寝起きは最悪だったであろう?」

食堂はわりと席が埋まっていた。宿の客では人数が合わないはずなので、近所の村人が利用しているのだろう。

その一番隅のテーブルにいたルノアンがシュトラウスとルヴィがやってきて席に座るとそう尋ねてきた。

クリスと言えば自分のティーカップに紅茶を注いでいる。

「ちょっと時間かかりましたけれど、ちゃんと起きてくださいましたから」

ルヴィの言葉を「起こされた」に変えたいのはなぜだろう。

「なる程。これからはルヴィにシュトラウスを起こしてもらおうか」

ティースプーンをカップから離れたクリスが目に入った。

寝起きは喉がひどく渴く。

シュトラウスは今まさにクリスが手にしようとしたティーカップを奪うと、彼女の文句が跳びだす前に中身を全て飲み干してしまっ
た。

そこまでは良かったのだが、この時シュトラウスは大きな間違い
をしでかした。

「おえええ！」

想像していたものとかけ離れた味に胃が拒否反応を示し、無駄だ
と分かつてはいたが吐き出したくなった。

「何するのよ！しかも汚いッ！」

至極当然、クリスに怒られたが、怒られることが不当と感じるよ
うな味がした。

「な、なんだよこの砂糖水！いや、お湯か。って、問題はそこじゃ
ねえ！」

「ただだけ甘いんだよ、気持ち悪いぞこの紅茶ッ！」

「文句言つなら勝手に飲まないでよ！それに、それくらい甘くないと美味しくないじゃない！！」

「はあ！？甘すぎだろが！既にもう紅茶という存在じゃないだろ！？お前つて味オンチなのか？」

クリスは顔を真つ赤にすると黙り込んだ。

そこに助け舟を出したのは意外にもルノアンだった。

「紅茶意外なら普通の味覚だと思うぞ。まあ、それだけに関して言えば、角砂糖を10個入れた紅茶が普通だと思っているのだから、オンチかもしれんな」

「いやいや！それはオンチとか言うレベルじゃなくねえか？」

10個も入れたら紅茶じゃなくて砂糖の味しかしくねえ？

クリスは腕を組むとシュトラウスから顔を背けた。
腹が立つたらしい。

まあ、人の趣味にこれ以上アレコレ言うのもなんなので、そこはスルーすることにし、目下重大な朝食タイムに入りたいのがシュトラウスの本音であつた。

四人が運ばれてきた朝食をとっている時、シュトラウスはすっかり言い忘れていたことを思い出した。

「悪いんだが、俺、ちょっとこの村に用事が出来たんだわ。

だから、お前ら先に『水の街』に行つててくれるか？食事済んだら直ぐに馬車でるだろ？」

ルノアンを始め、三人は一斉に自分の皿から顔を上げた。

「なんだと？いきなり何をいいだすんだ。用事つて、どんな用事だ」

「いや、私事なんだが……でも、村で馬借りてすぐに街に行くようにするからさ。大丈夫、時間はそんなにかからないはずだから」

「それなら私も残ろう。勇者殿探しは我々の使命だ」

その言葉を喜んで受け取っても良かったのだが、状況が状況だった。

ちらりとルヴィを見ると、シュトラウスは頬を掻いた。

「……セーリア様にルヴィのこと頼まれてるだろ。俺が最後まで送ってあげられないのは本当に悪いが、ルノアンとそれからクリスもいるし。

ルヴィ、すまないな」

シュトラウスが頭を下げると、ルヴィは慌てて両手を振った。

「いえ、そんな！もともとはわたしが勝手にお二人におしつけちゃ

ったお話ですし……」

昨日の魔物が現れたら剣士もなく心配だが、接近戦が出来るらしいクリスがいれば代わりになるだろう。むしろ、魔物を倒したのは彼女であつたし。

ルノアンはしぶしぶといった感じであつた。

「……然諾を重んず、だな。仕方ない、お前の代わりに私が最後までルヴィを届けねばならないか。

ともかく、早くその用事を済ませて来い」

なんとか幼馴染の承諾も取れたようだった。

シュトラウスはなるべく早く三人に追いつくために、さっそく立ち上がった。

「それじゃ、またな！」

風のように食堂を出て行ってしまったシュトラウスを見て、クリスがちらりとルノアンに目を向けた。

「あんたの幼馴染って、なんていうか突然な人ね」

「昔からあだからな」

ルノアンの目は笑っている。

「まーそれじゃ、支度でもしてこよっか、ルヴィちゃん」

「はい！」

二人の少女と、それから黒髪の青年は村を出るための身支度をしに部屋に戻っていった。

第17話 ご自宅訪問

この居た堪れない視線は3度目だ。

玄関ドアからのぞく女性から明らかに不審者の眼差しを受けるのは結構苦痛だ。

「……で、ですから、そんな、怪しい者じゃないんですよ？その、お宅のお子さんの声を聞かせていただければそれだけで良いんですが……」

「子供の声フエチの方ですか？」

—— シュトラウスは9281ダメージを受けた。

「それってどんだけマニアックううう！！？？
違いますよ違いますッ！……そんなマイナーな趣味はこれっぽっちもありませんッ！！」

「……そうなんですか？だって、息子の声聞きたいなって理由が他にあるとは思えませんし……」

「あえてなんでそんな理由！？？」

そこへひよっこりと玄関に顔をだす少年。5歳位だろうか、可愛らしい年頃だ。

「おかあさん、この変態さんだあれ？」

「待て待て待て待て！！！！可愛いとか前言撤回！！あんたんこの教育どうなんてんのおおお！！！！？」

「まあ。うちの教育にあなたのような大人に言われたくないわ」

それは暗に俺が駄目な大人と言いたいのかそうですか。

シュトラウスはその場に泣き崩れた。

男の子が彼の頭をなでなでしてくれる。

「……………も、もう十分です……………違いましたから……………」

可愛らしい声は夢のものとは違う。

「まあ。そんな短時間で堪能できるなんて、よっぽど高度なフェチなんですのね」

どんなフェチだ、この野郎おおお！！！！

シュトラウスはこの村で確実に不審者の汚名を築いていた。それもそのはず、いきなり子供のいる家に押しかけてきて「お子さんの声を聞かせてください」という怪しい行為に疑いを持たぬものなどいない。

流石に奮い立たせていた心もぼろぼろになり、6件目の家に行く前に家と家の間の路地ともいえないような隙間で腰を落ち着かせて頂垂れていた。

「俺のやっていることは間違っているのか……？」

冗談ナシで「殺す」なんていつている子供の心を矯正してやるなんて大それた事を言う気はないけれど、少しでも思いとどまってくれないだろうかという思いは、こんなに蔑まされることなのだろうか。

しばらくしてなんとか立ち上がる力を取り戻し、シュトラウスはふと周りを見渡した。家の裏口から多少離れているものの、広大な

森が路地の先に見えていてそこを通る影を見つけた。

「んん？あの人は……」

間違いない。

昨夜のぼさぼさ頭の槍男だ。

彼の姿はそのまま森の奥にいつてしまった。

「あんな陰鬱そうな森に用なんかあるのかねえ。トイレか？」

森には魔物が徘徊している。

昼間はそれ程多くはないが、それでも危険なことには変わらない。一人で用足しするくらいなら酒場でも宿屋でもそのトイレに駆け込むほうが無難で安全だ。

だがなんにせよ、昨夜見た限り彼はかなりの実力者と思っているシュトラウスはさほど心配することもなく、自分のやるべきことに向き合うために路地を抜け出る。うす暗闇から出たため太陽の光が少し目に痛かった。

シュトラウスが次に訪れた家は赤い屋根の家だった。トントン、と古びたドアを叩くと男の人が出てきた。

「誰だい、あんた」

……いかにも不審そうに言われた。

「あ、その……初めまして。俺…私はシュトラウス・ロベルと申します。

実はとある方から依頼を受けまして、この村でお子さんがいるお宅を訪ねさせていただいているんです」

「なんだそりゃ。俺の息子になにか用ってわけか？」

シュトラウスは首を縦に振る。

「実はその依頼主の方はこの村の近くで怪我をされたときに、子供に助けられたとおっしゃられていまして、その時のお礼がしたいということで、お探ししているんです」

「はあ……あんたに頼むほどそんな律儀なヤツもいるもんなのか。……だけど俺の息子じゃねーと思うぜ。そんな話を聞いたこともないし」

「そうですか……ですが一度でいいのでお会いできないでしょうか。確認したいこともございますし、それが私の仕事なのです。ちょっとで良いんで……」

なんとか食い下がるシュウトラスを頭を掻きながら見ていた男だったが、家の中に顔を向けて叫んだ。

「おーい！ロブ、エーム！ちょっと来い！」

すると扉の隙間からぱたぱたと軽い足取りが聞こえて来た。

「何、お父さん」

男の脇からひょっこり顔をのぞかせたのは、7歳くらいの男の子だった。

「ああ、この人がお前に用があるらしい……ん。ロブは？」

「お兄ちゃん？さっき出かけたよ？」

「本当か？つたく、またミーシャの家にでも行ったのかね。悪いな兄さん。ロブに会いたきやまた後に来てくれ」

弟の少年の声も外れ。

ならばシュトラウスは頷くだけだった。

「違っよ、お父さん」

「何が？」

いきなり弟のエームが男の袖をひっぱり、そう言った。

「お兄ちゃん、ミーシャちゃんの所に行ったんじゃないよ」

「そうなのか？じゃあ、ドン爺さんとか？」

だがエームは首を横に振る。

「森、だよ」

「！！！？？」

少年のその言葉に、男は顔を引きつらせた。
彼は強く息子の肩を両手で掴んだ。

「どういことだ！？ロブが、森に！？本当なのか！！！？」

「い、痛いよ、お父さんッ！！」

「なぜ早くそれを言わないんだッ！！何時だ！？何時家を出たんだ！！」

痛がる息子が目に入らないのか。男は顔を真っ青にして息子を目の前に怒鳴っていた。

確かに、いくらなんでも森に子供一人、は危険すぎる。

しかしシュトラウスは取り合えず男を少年から引き離す。

「息子さんが嫌がってますよ！！
とにかく、急いで探しましょう。森に行った息子さんの特徴や服装を教えてください！」

「あ、ああ……」

シュトラウスは男からロブの特徴を聞きだすと、急いで家に背を向ける。

「武器を持って何人かと一緒に探してください！貴方も危険ですから！！」

カチャカチャと耳に付く金属音を聞きながら、シュトラウスは走り出していた。

第18話 薄暗闇の森の中で

「彼」は額に汗を滲ませていた。

——なんて事だ。二手に分かれてしまつとは……

それは考えられない事態ではなかったが、それでもよりによって自分が交通手段に迷っている間に、とは。

だから「彼」は考えた。

「どちらに付くべきか」

ふと、「彼」は思い出した。

——そういえば……あの人はどちらかというとアイツの方を気にかけていた……

ならば、やはりこのまま「あちら」を追いかけて、この場に残つ

の方が良いのではないだろうか。

だから「彼」は遠くから見つめていた馬車に乗り込む黒髪の青年から視線を離すと、そのままそれを村に向けた。

森を背後にある、小さな村を――

「ロオブ――！！！！どこにいるんだあああああ！！！！？？」

大声を出しながら足場の悪い森の中を駆けるのは、正直苦しい。でもこの声が少しでも少年に届くならばと掠れる声を絞り出していた。

視界を塞ぐ邪魔な葉や枝を掻き分け、時に切り捨て進もうとするものの、足場は悪く思ったようには進めない。

シュトラウスは一度首筋の汗を腕で拭くと、大きく息を吸い込んだ。

「くそッ……俺って王都出てから人捜ししかしてねえし……」

苛立ちに任せて悪態をつくが、それで事態が良くなる訳でもない。だが彼が言うつおり、勇者捜しにルヴィ捜し、犯人捜しに謎の少年捜しの末、ロブと言う少年を捜すに至る。もはや何かに取り付かれていると言ってもいいのかもしれない。

突然膨れ上がったきたイライラを押さえつけ、シュトラウスは再び足を進める。

森の奥へ進めば進むほど、あたりの気配が淀んでいくようだった。

今の状況で幸いと言えるのはまだ陽が高いことだ。ちょうど昼頃のため、陽が落ちるまでは時間はある。

時間はあるが、だからといって魔物や魔獣が大人しくしている訳ではない。それに森の中は陽の光が入りにくく、暗い。

その証拠に「キイキイ」と金切り声を上げる兎くらいの大きさの魔獣が時々姿を現してはシュトラウスの存在に気がつき逃げていく。逃げてくれる相手ならいいが、これが追いかけると小さくてもたまらない。いちいち相手をしてもらえないのだ。

それに子供にとっては小さな魔獣でも十分危ない。魔獣にとっても子供と大人がいたら小さい方の獲物を狙うのは人と同じなのだ。

肩で息をし始めたシュトラウスは再び足を止めてあたりを見渡した。

木、木、木。あるいは葉か。

変わらない景色が不気味だった。

（村人たちの方で見つけていてくれればいいけど……）

それならそれで、シュトラウスが山中走り回っただけで話は済むのだ。

息を整えていると近づいてくる気配に気がついた。

しかも、気配を消してない。あからさまにシュトラウスに向かってくる。

——速いッ!!

「魔物か!？」

急いで剣を抜いた時にはぎりぎりであった。わずかな瞬間で刃がその武器を防いでいた。

「え…っ」

ぱちくりと剣の向こう側を見つめる。
それは相手も同じようだった。

「お前は……」

「あ、あああんたッ！」

目の前に居たのは、午前中に見かけた昨夜の槍男であった。

彼は槍を下ろして、ぼさぼさの前髪の間から訝しげな視線を向けた。

「どうしてこんな所に？……いや、いきなり襲って悪かった。てつきり魔物だと思ったんだが……」

「いや、それはいいけど……なんともなかったし！
って、それよりも……！」

シュトラウスは男の胸元を掴む。

「あんた、男の子見なかった！！？森の中でッ……」

「え？」

男は驚いたようにシュトラウスを見た。

「村の子なんだけど、森に行っていていなくなっちゃったんだよ！！
なあ、知らないか！？」

一瞬呆けたような男であったが、ぎこちなく首を横に振る。

「…いや。私は見ていないが……」

「そ、そうかぁ……」

頂垂れるシュトラウス。

だが男はこう言ってくれた。

「私も一緒に探そう。この森は確かに危険だ」

鋭い視線で見渡す男の様子は、シュトラウスが思っていた以上に森が危ないと警鐘をならすものだった。

「……………その子が……………れば良いんだが……………」

その微かな声は森を吹きぬける冷たい風に流れ、シュトラウスの耳に届くことはなかった。

第19話 少年、そして恐怖

唸るような声が聞こえた、気がする。

しかし恐々と後ろを振り返っても、ただ木がいつぱいで、それだけだった。

「は、早く、帰らないと……」

少年ロブは涙を飲み込んで、少しでも意識を保とうと独り言を続ける。

「……まだお昼だし、魔物でないよな？大丈夫、だよな？」

問いが返ってくるわけではないが、それを誰でも良いから肯定してもらいたかった。

森に来たのだってちよつとしたプライドだ。

幼い頃から絶対に森に入るなどいわれ続けている怖い森に一人で
行けるものならいってみろ、と友達に言われ売り言葉に買い言葉、
「やってやるよ」の一言だった。

だが、今は痛切にその過ちが押し掛かる。

昼間だった。がロブは両腕を摩った。

「大丈夫だよな…ちゃんと家に帰れるよな…」

身体が震える。

ロブは叫びたくなる悲鳴を飲み込み、再び歩を進めた。

その時――

「迷子？」

聞こえるはずのない声が、聞こえた。

驚いて後ろを振り返ると、ロブよりも年下だと思える少年が、森の中にぽつんと立っていた。とても細い少年だ。

その不自然さにロブは眉を顰めた。

誰もいない森で誰かに出会えた。嬉しいはずなのに、どうしてもその少年の存在に納得がいかなかった。

「大丈夫？ 森から出られないんでしょう？」

ロブはおずおずと頷いた。少年は笑っていた。

「……おまえも、森でまよったのか……？」

「うーん。そんなかんじかなあ」

「そんなかんじ……って。森は魔物がいるんだ、ぐずぐずしているとそのうち見つかったちゃうぞ」

「あはは。そうだね。殺されなくなかったらさっさと逃げるべきだ

よね」

ドキッとした。

「……そ、そうだな」

少年が笑みを深める。

「魔物に会ったら殺されちゃう。がぶがぶぼりぼり喰われちゃう」

「わ、分かってるよッ!!」

なにかが可笑しいと言うように少年が歌う様に言う。ロブはなぜか先ほどよりも怖くなって叫んでいた。

「俺もう行くけど、お前も来るだろ？同じ迷子のお前も置いていけないし」

いくら少し薄気味悪い少年だとしても、誰もいないよりはマシだ。ロブはこの時までそう思っていた。

「うん、だね！僕も君のことおいていけないもん」

年下にそう言われ、ロブは少し機嫌を悪くして彼を見た。弟にそんなことを言われたようなものだ。

だが、ロブはその顔を見なければ良かったと思った。後悔した。

「おいていけないって言うか、『行かせない』っていうのかなあ？」

くすくすくす……

無邪気で冷たい笑い声が森の中を響かせる。

ロブは後ずさっていた。身体がその場を離れたがっていた。

そこで気がついた。

こいつは、人間^{ひと}じゃない。

だから、ロブは一目散で少年から逃げ出した。駆けた。森の中を走り抜けた。

それでも少年の笑い声は背中から離れることはない。どこまでも追いかけて、逃さない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8767d/>

Find the Hero

2010年10月15日21時54分発行